

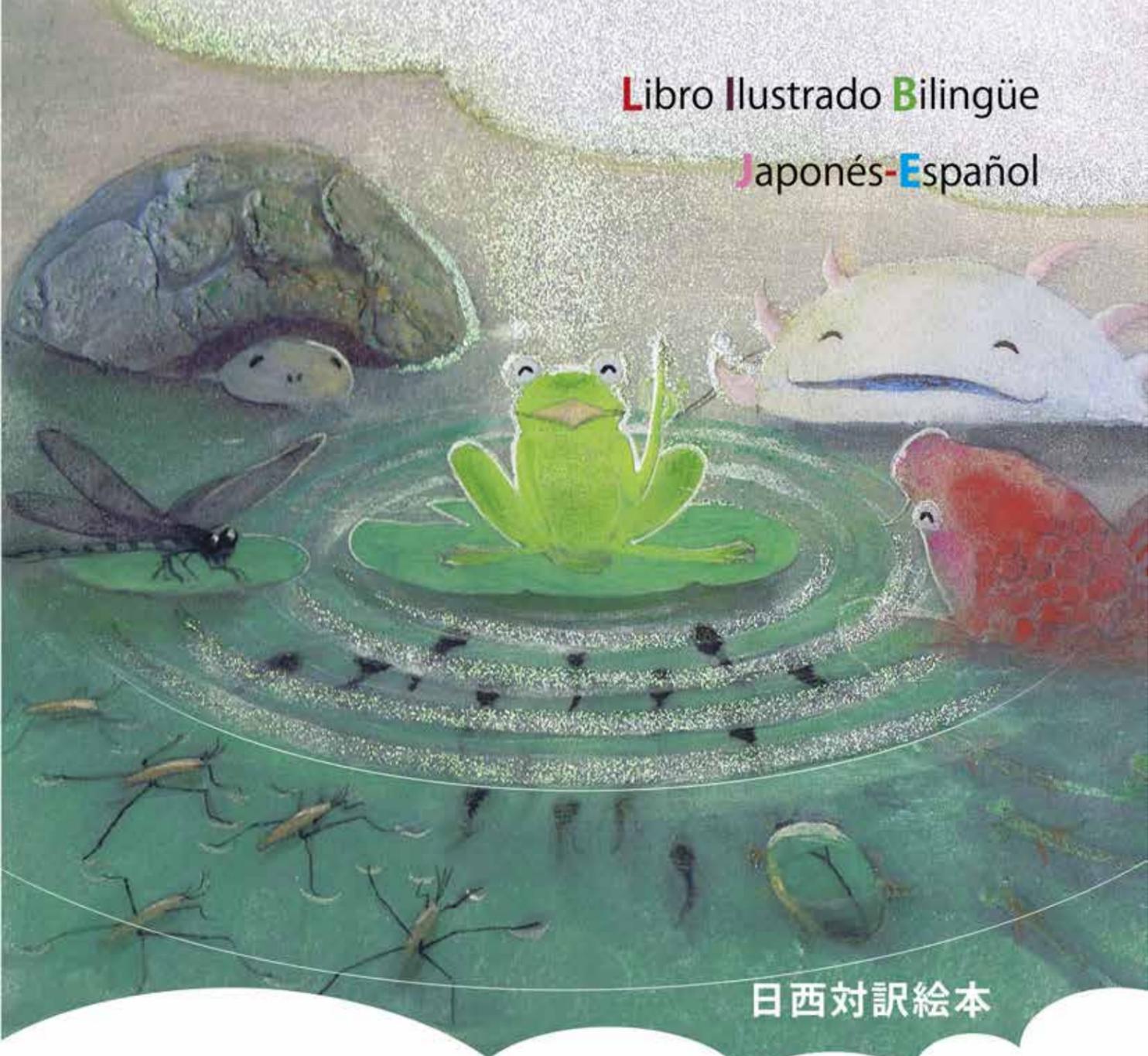
『日本の童話』全 7 話
日本語・スペイン語対訳絵本
Antología de 7 Cuentos Infantiles Japoneses
(Libro Ilustrado Bilingüe Japonés-Español)

PDF形式 電子書籍版
PDF eBook

2020.9

地球ことば村・世界言語博物館
The Archives of The World Languages

Libro Ilustrado Bilingüe
Japonés-Español



日西対訳絵本

Antología de Cuentos Infantiles Japoneses

にっぽん どうわ
日本の童話

The Archives of The World Languages
Archivo de Lenguas del Mundo

ESPAÑOL

もくじ

Índice

	文 Cuento	絵 Ilustración	ページ Página
1 あめ玉 Caramelito	新美 南吉 Nankichi NIIMI	てりい ゆかどうか Terry YUKADUKA	2
2 おむすびころりん Omusubi kororin - Bolas de arroz rodadas	三間 由紀子 編 Yukiko MIMA	武 美和 Miwa TAKE	6
3 背丈くらべ Comparando altura	相馬 泰三 Taizo SOMA	武智 祐治 Yuji TAKECHI	14
4 ごんぎつね Un zorro llamado Gon	新美 南吉 Nankichi NIIMI	えだ いずみ Izumi EDA	18
5 クモの糸 Hilo de araña	芥川 龍之介 Ryunosuke AKUTAGAWA	吉田 圭一郎 Keiichiro YOSHIDA	36
6 マカフシギ物語 El ave misteriosa	舟崎 克彦 Yoshihiko FUNAZAKI 三間 由紀子 Yukiko MIMA	舟崎 克彦 Yoshihiko FUNAZAKI	46
7 注文の多い料理店 El restaurante con muchos pedidos	宮沢 賢治 Kenji MIYAZAWA	佐々木 ひろこ Hiroko SASAKI	60

表紙デザイン: 吉田 圭一郎・小林 秀夫

Diseño de la cubierta : Keiichiro YOSHIDA / Hideo KOBAYASHI

1 あめ玉^{だま}

Caramelito

にいみ なんきち さく
新美 南吉 作
Cuento : Nankichi NIIMI

てりい ゆかどうか え
Ilustración : Terry YUKADUKA



- (1) 春の あたたかい 日の こと、わたし舟に 二人の 小さな 子どもを
つれた 女の 旅人が のりました。
舟が 出ようと すると、
「おうい、ちょっと 待ってくれ。」
5 と、土手の 向こうから 手を ふりながら、さむらいが 一人 走ってきて、
舟に 飛びこみました。
- (2) 舟は 出ました。
さむらいは 舟の 真ん中に どころ すわっていました。ぽかぽか あたた
10 かいので、そのうちに いねむりを 始めました。
黒い ひげを 生やして 強そうな さむらいが、こっくりこっくり するの
で、子どもたちは おかしくて、ふふふと 笑いました。
お母さんは 口に 指を 当てて、
「だまっておいで。」
15 と 言いました。
さむらいが おこっては 大変だからです。
子どもたちは だまりました。
- (3) しばらく すると、一人の 子どもが、
20 「母ちゃん、あめ玉 ちょうだい。」
と、手を 差し出しました。すると、もう 一人の 子どもも、
「母ちゃん、あたしにも。」
と 言いました。
- (4) お母さんは、ふところから 紙の ふくろを と 取り出しました。ところが、あ
25 め玉は、もう 一つしか ありませんでした。
「あたしに ちょうだい。」
「あたしに ちょうだい。」

- (1) Un día soleado de primavera, una mujer viajando junto a dos pequeñas niñas
abordó una barca de pasaje.
Justo cuando la barca estaba zarpando,
«Hey, esperen un momento».
- 5 Levantando las manos desde más allá de la orilla, un samurai llegó corriendo y
saltó a la barca.
- (2) La barca zarpó.
El samurai se sentó bruscamente en el centro de la barca y como estaba
10 calientito, empezó a quedarse dormido.
El samurai parecía muy fuerte por la negra barba, pero el balanceo de su cabeza
causó unas risitas en las niñas.
La madre se llevó el dedo a la boca, diciéndoles:
«¡Guarden silencio!»
- 15 Si el samurai se molestara, sería cosa seria.
Las niñas guardaron silencio.
- (3) Después de un rato, una de las niñas dijo, extendiendo su mano:
«Mamá, dame un caramelito».
- 20 La otra niña dijo:
«Mamá, yo también deseo».
- (4) La madre sacó de su pecho una bolsa de papel, pero solo había un caramelito.
«¡Es para mí!»
- 25 «¡Es para mí!»



(5) 二人の子どもは、両方からせがみました。あめ玉は一つしかない
ので、お母さんはこまってしまいました。

「いい子たちだから、待っておいで。向こうへ着いたら、買ってあげるからね。」と
5 と言って聞かせても、子どもたちは、「ちょうだいよう、ちょうだいよう。」
とだだをこねました。

(6) いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり目を開けて、
子どもたちがせがむのを見ていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじゃまされたので、このおさむ
10 らいはおこっているにちがいないと思いました。

「おとなしくしておいで。」と、お母さんは子どもたちをなだめました。
けれど、子どもたちは聞きませんでした。

(7) すると、さむらいがすらりと刀をぬいて、お母さんと子どもたちの
15 前にやって来ました。

お母さんは真っ青になって、子どもたちをかばいました。いねむりのじゃま
をした子どもたちを、さむらいが切ってしまうと思ったのです。

「あめ玉を出せ。」と、さむらいは言いました。

お母さんは、おそるおそるあめ玉を差し出しました。

20

(8) さむらいはそれを舟のへりにのせ、刀でぱちんと二つに
わりました。そして、「そうれ。」と、二人の子どもに分けてやりました。

それから、また元の所に帰って、こっくりこっくりねむり始めました。



(5) Ambas niñas querían el caramelito. Ya que solo había uno, la madre no sabía
qué hacer.

«Como ustedes, son dos niñas buenas, esperen a que llegemos al otro lado,
así inmediatamente iré a comprarles». Pero, aun así, las niñas continuaron
5 reclamando: «¡Dámelo a mí! ¡Dámelo a mí!»

(6) El samurai que parecía estar durmiendo abrió los ojos, fijando su mirada
en las perturbadoras niñas.

La madre se asustó mucho, ya que pensó que el samurai estaría furioso por
10 haberle interrumpido su sueño.

«¡Estén tranquilas!» dijo la madre a sus niñas. Pero las niñas no la
escucharon.

(7) El samurai sacó rápidamente su espada y fue directamente hacia la madre
15 de las niñas.

La madre se puso pálida, protegiendo a sus niñas. Porque pensó que el
samurai iba a descuartizar a las niñas por haberle perturbado el sueño al
samurai.

Entonces el samurai dijo: «¡Deme el caramelito!»

20 La madre, llena de miedo, le entregó el caramelito.

(8) El samurai colocó el caramelito en el borde de la barca y lo partió en dos:
«Sírvanse». El dividido caramelito se lo dio a las dos niñas.

Luego retornó a su lugar inicial, iniciando un cabeceo quedándose
25 profundamente dormido.

Traducido por Hisashi IWAMATSU/ Hatsuo IWAMATSU

2 おむすびころりん

Omusubi kororin – Bolas de arroz rodadas

みま ゆきこ へん
三間 由紀子 編
Cuento : Yukiko MIMA
たけ みわ え
武 美和 絵
Ilustración : Miwa TAKE



(1) 昔々あるところに、木こりのおじいさんがおばあさんと仲良く暮らしていました。

(2) ある晴れた日のお昼、おじいさんはいつものように切り株に腰をおろしおばあさんのにぎってくれたおむすびを食べようと、竹の皮の包みをひろげた。とたん、おむすびがひとつコロコロところがって— 足元の小さな穴へおっこちてしまいました。

(3) 「おやまあ、もったいないことをした。」とおじいさんが穴の中をのぞきこむと、
「おむすび コロリン コロコロリン、
コロリン ころげて穴の中」
と、かわいらしい歌声が穴の奥から聞こえてくるではありませんか。

(4) 「これはふしぎ、誰が歌っているのだろう。」と、おじいさんはもうひとつおむすびをころがして、穴に入れてみました。
「おむすび コロリン コロコロリン、
コロリン ころげて穴の中」
またまたかわいらしい歌声が、奥から聞こえてきます。

(5) 「ははあ、こりゃあおもしろいぞ。」
おじいさんは、次から次へおむすびをころがして・・・
とうとう、ひとつ残らず穴に落としてしまいました。

(1) Érase una vez un anciano leñador con su esposa. Los dos vivían muy felices.

(2) Por la tarde en un día soleado el viejito se sentó como siempre en un tocón a comer su bola de arroz que la viejita había hecho. Cuando desenvolvió la hoja de bambú, la bola de arroz rodó y se metió en un pequeño agujero a los pies del viejito.

(3) «¡Oh, no! ¡Qué desperdicio!» Cuando el viejito miró dentro del agujero, escuchó una canción linda viniendo del fondo.
«Una bola de arroz rodó,
vino rodando hasta el fondo del agujero» ♪

(4) «¡Qué extraño! ¿Quién estará cantando?»
El viejito dejó rodar otra bola de arroz.

«Una bola de arroz rodó,
vino rodando hasta el fondo del agujero» ♪

Se escuchó nuevamente esa hermosa canción desde el fondo del agujero.

(5) «Jajaja, esto es muy divertido».

El viejito dejó rodar todas las bolas de arroz en el agujero. No le quedó ninguna.



(6) 「おかえりなさい おじいさん。あれまあ どうしました そんなに
ひよろひよろ して。」
「おばあさんや、^{はら}腹ぺこだ ^{はら}腹ぺこだ ^{おおはら}大腹ぺこだあ。」

5 (7) おじいさんは ごはんを ^{はら}腹いっぱい ^た食べてから、おばあさんに ^{ひるま}昼間の
ふしぎな ^{うた}歌の ことを ^{はな}話して きかせました。

(8) 「まあまあ、いったい ^{だれ}誰が ^{うた}歌っているのかしらねえ。」
「それさ、それが ^し知りたくてのう。」

10 「それでは、^{あした}明日は ^たたくさん ^たたくさん おむすびを ^も持って ^い行きなされ。
^{なんど}何度も ^{なんど}何度も ^{うたごえ}歌声が ^き聞けるように。」
おばあさんは、お米を ^{こめ}一升 ^{いっしょう}炊きました。

(9) ^{つぎ}次の ^ひ日、^{あさ}朝 ^{はや}早くから ^{やま}山に ^き来た おじいさん、
15 わくわく ^{ひる}しながら ^おお昼に ^{なる}なるのを ^ま待って、
コロリンと おむすびを ^{ころ}ころがして ^{あな}あの ^{あな}穴に ^い入れました。

(10) 「おむすび コロリン コロコロリン、
コロリン ^{あな}ころがて ^{なか}穴の ^{なか}中」



(6) «¡Bienvenido a casa mi viejito! ¿Qué pasó? Se te nota cansado».
«¡Oh mi viejita! Tengo hambre, estoy hambriento, muy hambriento».

(7) El viejito comió y luego le contó a la viejita sobre la canción extraña que
5 había escuchado ese día.

(8) «¿Quién sería el que cantó?»
«¡Me gustaría saberlo!»

10 «Entonces, mañana lleva muchas bolas de arroz. De esa manera podrás
escuchar la canción muchas veces».

La viejita cocinó arroz lleno de olla para el viejito.

(9) Al día siguiente, bien temprano, el viejito salió hacia la montaña.
Esperó ansioso la hora del almuerzo.

15 Entonces dejó rodar una bola de arroz dentro del agujero.

(10) «Una bola de arroz rodó,
vino rodando hasta el fondo del agujero» ♪



(11) 「ほっほっほ、やっぱり ^{うた}歌が ^き聞こえるわい。なんと まあ ^{きれいな}うたごえ ^{うた}歌声じゃ。いったい ^{だれ}誰が ^{うた}歌っておるか ^し知りたいのう。」
 「ああ そうじゃ。わしが ^{じぶん}自分で ^{はい}入ってみれば ^し知れるだろうさ。」

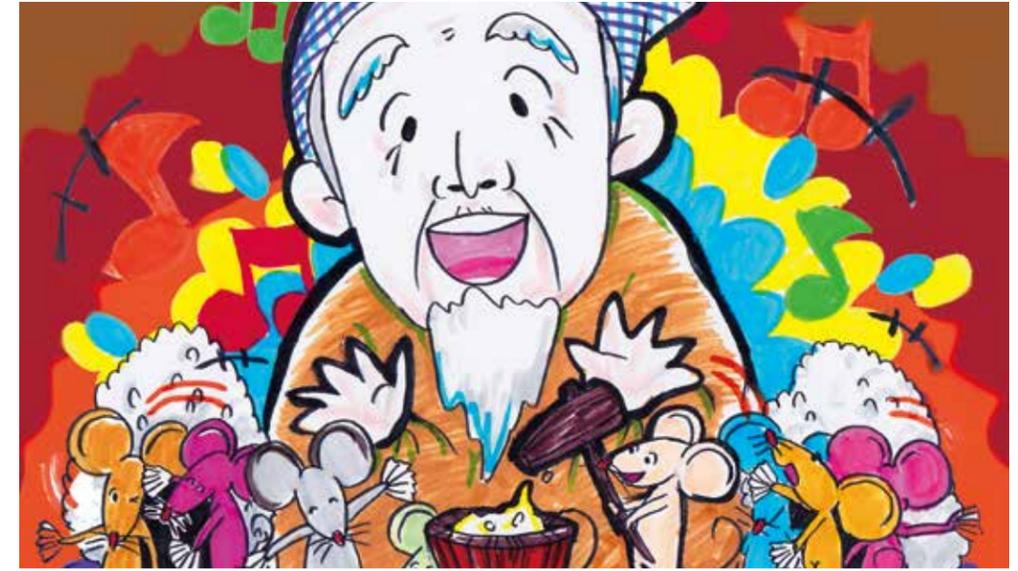
5 (12) おじいさんは ^{りょうて}両手で ^{ひざ}ひざを ^{かかえ}かかえ、^{せなか}背中を ^{まる}丸く ^{まる}丸く ^{まる}丸めて、おむすびみたいに ^{コロリン}コロリンと ^{あな}穴の ^{なか}中に ^{ころげて}ころげて ^{はい}入ってみました。
 すると、^{あな}穴の ^{そこ}底では ^{おおぜい}おおぜいの ^{ネズミ}ネズミたちが ^{おしくらまんじゅう}おしくらまんじゅう ^{しな}しながら ^{うた}歌っているでは ^ありませんか。

10 「おむすび ^{コロリン}コロリン ^{コロリン}コロリン、
 おじいさんも ^{コロリン}コロリン ^{コロリン}コロリン」

(13) 「おじいさん、きのうも ^{きょう}今日も ^{たくさん}たくさんのおむすびを ^{ごちそう}ごちそうして ^{ください}くださって ^{ありがとう}ありがとう。お礼に ^{おもち}おもちを ^{ついて}ついて ^{ごちそう}ごちそうしましょう。」

15 (14) ^{ネズミ}ネズミたちは、^{ちいさな}ちいさな ^{ウス}ウスと ^{キネ}キネを ^{はこ}運び出して、

「^{ペタン}ペタン ^{ペタン}ペタン ^ココ
^{ネズミ}ネズミの ^{おもち}おもち ^だだ ^{ペタン}ペタン ^ココ
 20 ^{やさしい}やさしい ^{おじいさん}おじいさん ^{めしあがれ}めしあがれ
^{ネズミ}ネズミの ^{おもち}おもち ^だだ ^{ペタン}ペタン ^ココ」



(11) «Jajaja. ¡Qué suerte la mía poder escuchar nuevamente esa hermosa canción! Me gustaría saber quién la está cantando».
 «¡Oh, ya sé! Si me meto por el agujero, podré averiguarlo».

5 (12) El viejito abrazó sus rodillas con ambas manos.
 Curvó su cuerpo hasta quedar redondo como una bola de arroz. Entonces trató de ingresar al agujero rodando.
 En el fondo del agujero había muchos ratones bailando y cantando en círculo.

10 «Una bola de arroz rodó,
 un viejito rodó también» ♪

(13) «Viejito, estamos muy agradecidos por las bolas de arroz de ayer y de hoy. Como agradecimiento, te ofrecemos MOCHI, tarta de arroz».

15 (14) Los ratones trajeron un pequeño mazo y un mortero:
 «Pettan, pettan, pettanco.
 Es nuestro MOCHI, tarta de arroz, pettanco.
 Viejito bondadoso, prueba nuestro MOCHI, tarta de arroz.
 20 Es nuestro MOCHI, tarta de arroz, pettanco» ♪



(15) おじいさんは、それは それは おいしい おもちを おなかが はちきれそうになるまで ごちそうに なりました。

(16) 「おじいさん、おみやげに これを さしあげましょう。これは 打ち出の小づちです。ほしい ものを 唱えながら 振れば、なんでも 出てきます。親切に してくださった お礼です。」

(17) おじいさんは 家に もどって おばあさんに 聞きました。
「おばあさんや、お前は 何が ほしいかね。」

(18) 「そうですねえ。ずっと ずっと 昔から ほしかったのは そう 赤ん坊。かわいい 赤ちゃんが いたら、どんなに 幸せでしょうねえ。」

(19) 「よし、やってみよう。」
おじいさんは 打ち出の小づちを ぶいん ぶいんと 振りました。
「赤ん坊 出てこい、赤ん坊 出てこい。」
すると、

(20) おばあさんの ひざには、もう おむすびみたいに 丸々 太った かわいい 赤ちゃんが 乗っていました。

(21) おじいさんと おばあさんは 赤ん坊を かわいがりながら、それからも 仲良く 暮らしましたとさ。



(15) El viejito comió, comió y comió hasta que la barriga estaba a punto de reventar.

(16) «Viejito, lleva esto de regalo. Esto es un pequeño mazo mágico. Gira el mazo pensando en el deseo y tu deseo será cumplido. Esto es por tu gran bondad hacia nosotros».

(17) El viejito regresó a casa y preguntó a su esposa.
«Abuela, ¿qué es lo que más deseas?»

(18) «Desde hace mucho tiempo, siempre, siempre deseé un hermoso bebé. ¡Si tuviéramos un bebé, no podríamos ser más felices!»

(19) «Entonces probemos».
El viejito giró el mazo mágico con gran fuerza.
«Aparece bebé, aparece bebé».
Y entonces...

(20) En las rodillas de la viejita había un hermoso bebé, rollizo y gordo como una bola de arroz.

(21) Y vivieron los viejitos muy felices, cuidando del bebé.

Traducido por Hisashi IWAMATSU/ Hatsuo IWAMATSU

3 背丈くらべ

Comparando altura

そうま たいぞう さく
相馬 泰三 作

Cuento : Taizo SOMA

たけち ゆうじ え
武智 祐治 絵

Ilustración : Yuji TAKECHI



(1) 大昔、—— むろん、人間などという せこせこした 動物が、まだ この世へ 現われない 前の ことです。

ある 日、雲が もうもうと わき起こって、ほうぼうの 山へ おそいかかって きました。そして、高さの 順に 一つずつ 下の方から 埋めて行きました。

5 しだいに 峰の 数が 減って、やがて、最後に、この 雲の 大洪水は、富士山と 八ヶ岳の 頭だけを 残して、あらゆる ものを おぼれさせてしまいました。

(2) そこで、八ヶ岳が 富士山を かえりみて、「とうとう 君と 僕だけに 10 なってしまったね。」と 言葉を かけました。

すると 高慢ちきな 富士山は、

「うん。しかし、そのうちに 僕だけに なるのだ。」と 豪語しました。

こう 言われると、八ヶ岳も だまっている わけには まいりません。

「なんだと！それは こっちで 言う ことだよ。論より 証拠、今に みてい

15 る！」

「じゃあ、貴さまは、僕よりも 高いと 思っているのか。」

富士山は、もう なかば けんか腰です。売り言葉に 買い言葉と いう やつ

で、八ヶ岳も 負けては いずに、

「じゃあ、君は、僕よりも 高い つもりで いたのか。」と 同じような こと

20 を 言って、それに 応じました。

「生意気な 奴だ。」と 富士山が 言いました。

(1) Esta historia se remonta hacia muchísimo tiempo atrás, a un tiempo muy remoto donde el animal mezquino llamado ser humano aún no aparecía en este mundo.

Cierto día aparecieron gruesas capas de nubes que se dirigieron hacia las 5 montañas en todas direcciones, siendo invadidas de una en una por orden de altura.

Poco a poco el número de los picos de las montañas disminuyó. Finalmente, solo los picos del Monte Fuji y Yatsugatake quedaron. El resto totalmente se ahogó en la gran inundación de nubes.

10 (2) Entonces el Monte Yatsugatake volteó y miró al Monte Fuji, diciéndole: «Solo quedamos tú y yo».

Entonces el arrogante y vanidoso Monte Fuji le dijo:

«Sí, pero al final me quedaré yo».

15 Al escuchar esto, el Monte Yatsugatake no se quedó callado:

«¿Qué has dicho? ¡Eso lo debería decir yo! Las pruebas mostraran más que las palabras. ¡Tú verás!»

«¿Entonces tú piensas que eres más alto que yo?»

El Monte Fuji estaba en pie de guerra. El Monte Yatsugatake no quería salir 20 perdiendo, entonces replicó con la misma moneda:

«¿Entonces tú piensas que eres más alto que yo?»

«¡Eres tan descarado!» respondió el Monte Fuji.



「どっちが。」と やつがたけ 八ヶ岳が やり返しました。

「けしからん やつだ。」

「笑わしやがらあ。見ろよ。この 通り 僕の方 が こんなに 高い じゃないか。」

5 「いいや、僕の方 が 高い。」

(3) しかし、雲は、あいにくと 最後の 決着を つけては くれませんでした。それでは、と いうので、いよいよ 背丈くらべを やってみる ことになりました。

10 —長い 樋を 両方の 頭に 乗せ、それに 水を 注ぎます。そして、その水の 流れて行った 方が 負けと いう こと になるのです。いかさま、これでは ごまかしが きかない わけです。そして、その 結果、八ヶ岳の 勝ちになりました。

15 (4) ところで、負けぎらいな 富士山は、どうしても 腹の 虫が おさまりません。いよいよ 自分の 負けと きまるのが 早いか、ごうを 煮やして、いきなり、両方の 頭に 渡してあった 樋を 取りはずし、それでもって、いやと いうほど 相手の 横面を なぐりつけました。

20 かわいそうに、その ために やつがたけ の 首は お 折れて、離れて、宙に 飛んでしまいました・・・
富士山が 日本一と 言われるように なったのは、これから 後の こと であります。



El Monte Yatsugatake replicó: «Entonces tú eres».

«Eres tan grosero».

«Me haces reír. Como puedes ver, soy más alto».

«No, yo soy más alto».

5

(3) Desafortunadamente las nubes no decidieron a favor de ninguno de los dos. Para tener una decisión final y poder comparar las alturas, colocaron una larga canaleta en el tope de los picos de los dos montes en el cual se hará pasar agua. El perdedor sería él que se escurriera el agua hacia su lado.

10 De esta manera no habría duda de quién es el vencedor. Y el vencedor fue el Monte Yatsugatake.

(4) El Monte Fuji, quien no es un buen perdedor, no aceptó su derrota. Y sumamente irritado, retiró de forma brusca la canaleta que estaba en los picos de los dos montes, cortándole el pico al Monte Yatsugatake.

El cuello del pobre Monte Yatsugatake se rompió y salió volando por los aires.

Después de esto, se dijo que el Monte Fuji es el primer y más alto monte de Japón.

Traducido por Hisashi IWAMATSU/ Hatsuo IWAMATSU

4 ごんぎつね

Un zorro llamado Gon

にいみ なんきち さく
新美 南吉 作
Cuento : Nankichi NIIMI

えだ いずみ え
Illustración : Izumi EDA

1

(1) これは、わたしが ^{ちい}小さい ^{むら}ときに、^{もへい}村の 茂平と ^いいう ^{おじい}おじいさんから ^き聞いた ^{はなし}お話です。

^{むかし}昔は、わたしたちの ^{むら}村の ^{ちか}近くの ^{なかやま}中山と ^いいう ^{ところ}所に、^{ちい}小さな ^{おしろ}おしろが
5 ^ああって、^{なかやま}中山様と ^いいう ^{とのさま}お殿様が ^おおられたそうです。

(2) その ^{なかやま}中山から ^{すこ}少し ^ははなれた ^{やま}山の中、^{なか}「ごんぎつね」と ^いいう
キツネが ^いいました。ごんは、ひとりぼっちの ^こ小ギツネで、^{しだ}しだの ^いいっぱい
しげった ^{もり}森の中、^{なか}あなを ^ほほって ^す住んでいました。そして、^よ夜でも ^ひ昼で
も、^{あた}辺りの ^{むら}村へ ^で出てきて、^{いた}いたずらばかり ^ししました。^{はたけ}畑へ ^{はい}入って ^いいもを
10 ^ほほり ^ち散らしたり、^{なたね}菜種がらの ^ほほしてあるのへ ^ひ火を ^{つけ}つけたり、^{ひやくしょうや}百姓家の ^うう
ら ^て手に ^つつるしてある ^ととんがらしを ^むむしり取っていたり、^いいろんな ^こことを
しました。

(3) ある ^{あき}秋の ^こことでした。^に二、^{さん}三日 ^{あめ}雨が ^{つづ}ふり続いた ^{その}その ^{あいだ}間、^{ごん}ごんは、
15 ^{そと}外へも ^で出られなくて、^{あな}あなの ^{なか}中に ^{しゃ}しゃがんでいました。

(4) ^{あめ}雨が ^ああがると、^{ごん}ごんは、^ほほっとして ^ああなから ^{はい}はい出ました。^{そら}空は ^かか
ら ^とと ^はは晴れていて、^{もず}モズの ^{こえ}声が ^{キン}キン ^{ひび}ひびいていました。



1

(1) Esta historia me fue contada cuando aún era niño por un aldeano de edad avanzada llamado Mohei.

Hace mucho tiempo, cerca de nuestra aldea había una localidad llamada
5 Nakayama. En ella había un castillo, en el que moraba un señor feudal llamado Nakayama.

(2) En los bosques cercanos a la localidad de Nakayama vivía un zorro llamado Gon. Él era un pequeño zorro huérfano, que vivía dentro de un hueco cavado
10 en medio de un bosque de helechos. A Gon no le importaba si era de noche o de día para acudir a la aldea vecina, solo para hacer travesuras. Gon hacía muchas travesuras, entre ellas, entrar al huerto, arrancar y esparcir las papas, colocar al fuego las ramas de colza que se habían dejado secar, arrancar los pimentones que estaban colgando en el patio de los agricultores.

15

(3) Un otoño llovió durante 2 o 3 días. Gon no pudo salir y estuvo escondido en una cueva.

(4) Cuando dejó de llover, Gon respiró aliviado y arrastrándose salió del hueco.
20 El cielo estaba claro, limpio y el canto de los pájaros resonaba fuertemente.



(5) ごんは、^{むら}村の ^{おがわ}小川の ^{つづみ}つづみまで ^で出てきました。あたりの ^{すすき}すすきの
 5 ほには、まだ ^{あめ}雨の ^{しずく}しずくが ^{ひか}光っていました。川は、いつもは ^{みづ}水が ^{すく}少ない
 のですが、^{みつ}三日もの ^{あめ}雨で、^{みづ}水が ^どどと ^まましていました。ただの ^{とき}ときは ^{みづ}水
 につかる ^{こと}ことのない、^{かわ}川べりの ^{すすき}すすきや ^{はぎ}はぎの ^{かぶ}かぶが、^{きいろ}黄色く ^{にご}にごっ
 た ^{みづ}水に ^{よこ}横だおしに ^ななって、^ももまれています。ごんは、^{かわしも}川下の ^{ほう}方へと、^{ぬか}ぬか
 る ^{みち}道を ^{ある}歩いていきました。

(6) ふと ^み見ると、^{みづ}川の ^{なか}中に ^{ひと}人が ^{いて}いて、^{なに}何か ^ややっています。ごんは、^み見
 つからないように、^{そう}そうっと ^{くさ}草の ^{ふか}深い ^{ところ}所へ ^{ある}歩きよって、^{そこ}そこから ^じじと
 10 のぞいてみました。

(7) 「^{ひょうじゅう}兵十だな。」と、ごんは ^{おも}思いました。^{ひょうじゅう}兵十は、^{ぼろ}ぼろの ^{くろ}黒い ^{きもの}着物
 を ^ままくし上げて、^ここの ^{ところ}ところまで ^{みづ}水に ^{ひた}ひたしながら、^い魚を ^ととる ^{はり}はり
 きりと ^{いう}いう ^{あみ}網を ^ゆゆすぶっていました。はちまきを ^{した}した ^{かお}顔の ^{よこ}横ちょう
 15 に、^{まる}円い ^{はぎ}はぎの ^は葉が ^{いち}一まい、^{おお}大きな ^ほほくろみたいに ^へへばり付いていま
 した。

(8) ^{しばらく}しばらく ^{すると}すると、^{ひょうじゅう}兵十は、^{はり}はりきり^{あみ}あみの ^{いち}いちばん ^{うし}後ろの ^ふふくろ
 のように ^ななった ^{ところ}ところを、^{みづ}水の ^{なか}なかから ^ももちあげました。その ^{なか}中には、^しし
 20 ばの ^ね根や、^{くさ}草の ^は葉や、^ききさった ^き木切れなどが、^ごごちゃごちゃ ^は入っていま
 したが、^{でも}でも、^{ところ}ところどころ、^{しろ}白い ^{もの}物が ^{きら}きら ^{ひか}光っています。それは、^{ふと}太い
 ウナギの ^ははらや、^{おお}大きな ^キキスの ^ははらでした。兵十は、^びびくの ^{なか}中へ、その
 ウナギや ^キキスを、^ごごみと ^いいっしょに ^ぶぶちこみました。そして、^{また}また、^ふふくろ
 の ^{くち}口を ^{しば}しばって、^{みづ}水の ^{なか}中へ ^い入れました。



(5) Gon se acercó al banco de un pequeño río que pasaba por la aldea. En
 las puntas de las cañas aún brillaban las gotas de lluvia. Este río por lo
 general tenía muy poca agua, pero por la lluvia de los 3 días su volumen
 había aumentado considerablemente. Normalmente las hojas de las cañas y
 5 las raíces de las flores silvestres estaban sumergidas en el agua del río, pero
 ahora estaban sumergidas y arrastradas por las aguas turbias y amarillentas.
 Gon fue caminando río abajo por el camino enlodado.

(6) De pronto Gon vio a una persona dentro del río haciendo alguna cosa.
 10 Gon se aproximó sigilosamente hasta unos matorrales y sin ser visto, lleno de
 curiosidad se quedó mirando a la persona.

(7) Gon pensó: «Es Hyoju». Hyoju enrollaba su viejo y negro kimono, y estaba
 dentro del agua hasta los muslos, sacudiendo unas redes de pescar llamadas
 15 HARIKIRI. En la cabeza llevaba un HACHIMAKI (una tira de tela con que se
 envuelve la cabeza) y se podía ver una hoja redonda de flor silvestre pegada
 en su mejilla como un lunar gigante.

(8) Después de haber transcurrido un buen tiempo, Hyoju sacó del agua la
 20 parte inferior de las redes en forma de bolsa. En esta bolsa se podía observar
 una gran cantidad de raíces de hierbas, hojas de maleza y pedazos de madera
 podrida. Pero también se notaba en ciertos lugares, que había unas cosas
 blancas que brillaban intensamente. Eran las barrigas de gordas anguilas y
 grandes peces. Hyoju colocó las anguilas, los peces y la basura en la canasta.
 25 Luego amarró nuevamente la bolsa y la sumergió otra vez en el agua.



(9) 兵十は、それから、びくを もって 川から 上がり、びくを 土手に 置
いといて、何を さがしにか、川上の 方へ かけていきました。

(10) 兵十が いなくなると、ごんは、ぴよいと 草の なかから 飛び出して、
5 びくの そばへ かけつけました。ちょっと、いたずらが したくなったのです。
ごんは、びくの なか さかなをつかみ出しては、はりきりあみの かかっている
ところより 下手の 川の中を 目がけて、ぽんぽん 投げこみました。どの 魚も、
トボンと 音を 立てながら、にごった 水の中へ もぐりこみました。

10 (11) いちばん しまいに、太い ウナギをつかみに かかりましたが、なに
しろ ぬるぬると すべりぬけるので、手では つかめません。ごんは、じれった
くなって、頭を びくの なかにつこんで、ウナギの 頭を 口に くわえまし
た。ウナギは、キュッと いって、ごんの 首に まきつきました。その とたん
に 兵十が、向こうから、

15 「うわあ、ぬすっとギツネめ。」

と どなり立てました。ごんは、びっくりして 飛び上がりました。ウナギを ふ
りすてて にげようと しましたが、ウナギは、ごんの 首に まきついたまま
はなれません。ごんは、そのまま 横っ飛びに 飛び出して、一生懸命 にげてい
きました。

20

(12) ほらあなの 近くの ハンの 木の 下で ふり返ってみましたが、兵十
は 追っかけては 来ませんでした。



(9) Después, Hyoju sacó la canasta del agua, subiendo del río, dejó la canasta
en el banco y salió corriendo en busca de alguna cosa en dirección río arriba.

(10) Cuando Hyoju estaba fuera del alcance de los ojos de Gon, este salió
5 de los matorrales, y corrió hasta colocarse cerca de la canasta. Gon tuvo la
tentación de hacer una pequeña travesura. Sacó los peces que estaban dentro
de la canasta y los tiró dentro del río corriente abajo del lugar de la red
HARIKIRI. Todos los peces hacían bulla al caer y sumergirse en las turbias
aguas del río.

10

(11) Finalmente intentó atrapar la gorda anguila, pero como era escurridiza no
le fue posible cogerla. Gon estaba molesto, introdujo su cabeza en la canasta
y con los dientes atrapó la cabeza de la anguila. La anguila soltó un chorro y
se enroscó en el pescuezo de Gon. En ese momento Hyoju desde el otro lado

15 gritó:

«¡Ah, zorro ladrón!»

Gon, sorprendido por el susto, intentó dejar la anguila y huir, pero esto no le
fue posible, ya que esta estaba enroscada a su pescuezo. Gon salió corriendo
con la anguila enrollada a su pescuezo, huyendo desesperadamente.

20

(12) Al llegar cerca del hueco debajo del árbol de aliso, Gon miró hacia atrás.
Hyoju no lo estaba persiguiendo.



(13) ごんは ほっとして、ウナギの ^{あたま}頭を かみくだき、やっと ^{はず}外して、あなの ^{そと}外の ^{くさ}草の ^は葉の ^{うえ}上に のせておきました。

2

5 (1) ^{とおか}十日ほど たって、ごんが ^{やすけ}弥助と ^{ひやくしやう}いう ^{とお}お百姓の ^{うち}うちの ^{うら}うらを ^{とお}通りかかりますと、その ^{いちじく}イチジクの ^き木の ^{かげ}かげで、^{やすけ}弥助の ^{かない}家内が、^{はぐろ}お歯黒をつけていました。かじ屋の ^や新兵衛の ^{しんべえ}うちの ^{うら}うらを ^{とお}通ると、^{しんべえ}新兵衛の ^{かない}家内が、かみを すいていました。ごんは、「ふふん、^{むら}村に ^{なに}何か ^{ある}あるんだな。」と ^{おも}思いました。「^{あきまつ}なんだろう、^{まつ}秋祭りかな。祭りなら、^{ふえ}たいこや ^{おと}笛の ^{おと}音が ^ししうな ^{もの}ものだ。それに ^{だい}だいいち、^{みや}お宮に ^{のぼり}のぼりが ^た立つ ^{はず}はずだが。」

15 (2) ^{かんが}こんな ^{こと}ことを ^{かんが}考えながら ^きやって来ますと、いつのまにか、^{おもて}表に ^{あか}赤い ^{いど}井戸の ^{ある}ある ^{ひやうじゆう}兵十の ^{うち}うちの ^{まえ}前へ ^き来ました。その ^{ちい}小さな ^{こわれ}こわれかけた ^{いえ}家の中 ^{なか}には、^{ひと}おおぜいの ^{あつ}人が ^{あつ}集まっています。よそ ^ゆ行き ^{きもの}の ^き着物を ^き着て、^てこしに ^お手ぬぐいを ^{おん}さげたりした ^{おんな}女たちが、^{おもて}表の ^{かま}かまどで ^ひ火を ^{たい}たいています。大きな ^{なか}なべの ^{なか}中では、^な何か ^{ぐず}ぐず ^ににえています。

(3) 「ああ、^{おも}そうしきだ。」と、ごんは ^{おも}思いました。「^{ひやうじゆう}兵十の ^{うち}うちの ^{だれ}だれが ^し死んだんだろう。」

20

(4) ^{ひる}お昼が ^{むら}すぎると、ごんは、^{むら}村の ^{ぼち}墓地へ ^い行って、^{ろくじぞう}六地藏さんの ^{かげ}かげにかくれていました。いい ^{てんき}お天気で、^{とお}遠く ^む向こうには、^やおしろの ^や屋根が ^{わら}わらが ^{ひか}光っています。^{ぼち}墓地には、^{あか}ひが ^なん花が、^{あか}赤い ^{つづ}きれのように、^{つづ}さき ^{つづ}つづいていました。と、^{むら}村の ^{ほう}方から、^なカーン、^なカーンと、^なかねが ^な鳴ってきました。そうしきの ^で出る ^{あい}合図です。

25

(13) Gon suspiró aliviado. Destrozó con los dientes la cabeza de la anguila y logrando finalmente soltarse de ella, la colocó en los matorrales fuera de su hueco.

2

5 (1) Transcurridos aproximadamente 10 días, cuando Gon estaba pasando por la parte trasera de la casa del agricultor Yasuke, a la sombra de la higuera, la esposa de este se estaba pintando los dientes de negro. Al pasar por la parte trasera de la casa del herrero Shimbei, su esposa se estaba peinando los cabellos. Gon pensó: «Debe de estar pasando algo importante en la aldea. ¿Qué 10 será? ¿Será el festival de otoño? Pero si fuera el festival, debería escucharse el sonido de los tambores y flautas, además de las banderas colocadas en el templo».

(2) Pensando en esto, Gon había llegado al pozo rojo que estaba frente a la 15 casa de Hyoju. Dentro de esta pequeña casa casi en ruinas, se habían reunido muchas personas. Las mujeres, vestidas con sus mejores kimonos, llevaban colgando en la cintura una toalla de mano. Estaban cerca del horno frente a la casa y dentro de una gran olla algo se estaba cocinando.

20 (3) Gon pensó: «Debe de ser un funeral. ¿Quién habrá fallecido en la familia de Hyoju?»

(4) Pasado el mediodía, Gon fue hacia el cementerio de la aldea y se escondió 25 entre las estatuas de los 6 santos JIZO. El tiempo era bueno y el tejado del castillo estaba brillando. En el cementerio muchas flores de lirio araña roja HIGANBANA estaban floridas como si fuera una alfombra roja extendida. En la aldea se dio inicio al repicar de las campanas anunciando la salida para el entierro.

(5) やがて、白い着物を着たそれつもの者たちがやって来るのが、ちらちら見え始めました。話し声も近くなりました。それつは、墓地へ入ってきました。人々が通ったあとには、ひがん花がふみ折られていました。

5 (6) ごんは、のび上がって見ました。兵十が、白いかみしもを着けて、いはいをささげています。いつもは、赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「ははん、死んだのは、兵十のおっかあだ。」ごんは、そう思いながら頭をひっこめました。

10 (7) そのばん、ごんは、あなかなかで考えました。「兵十のおっかあは、どこについていて、ウナギが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきり網を持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、ウナギを取ってきてしまった。だから、兵十は、おっかあにウナギを食べさせることができなかった。そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、ウナギが食べたい、ウナギが食べたいと思いつつ死んだんだろう。ちよつ、あんないたずらをしなければよかった。」

3

20 (1) 兵十が赤い井戸のところで麦をといでいました。兵十は、今までおっかあと二人きりで、まずしいくらしをしていたもので、おっかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

25 (2) ごんは、物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、イワシを売る声がします。「イワシの安売りだあい。生きのいい、イワシだあい。」

30 (3) ごんは、そのいせいのいい声のする方へ走っていきました。と、弥助のおかみさんが、うら戸口から、「イワシをおくれ。」と言いました。イワシ売りは、イワシのかごを積んだ車を道ばたに置いて、ぴかぴか光るイワシを両手でつかんで、弥助のうちのなかへ
35 持って入りました。

(5) Después, Gon comenzó a vislumbrar el cortejo fúnebre de las personas vestidas con kimono blancos. Se escuchaban las voces de las personas conversando. Las personas que asistían al entierro empezaron a ingresar al cementerio. Por donde transitaban las personas, las flores quedaban
5 despedazadas y pisoteadas.

(6) Para ver mejor, Gon estiró el cuerpo, Hyoju vestía con un kimono blanco, formal para el funeral y llevaba la tablilla donde estaba escrito el nombre de la persona fallecida. Hyoju siempre era una persona llena de vida, con el rostro
10 colorado como si fuese un camote, pero ahora se lo veía abatido.

«La persona fallecida debe de ser la madre de Hyoju», pensó Gon, escondiéndose nuevamente.

(7) Esa noche, dentro del hueco, Gon pensó: «La madre de Hyoju estaba
15 enferma y probablemente dijo que deseaba comer una anguila. Es por eso que Hyoju salió con su red HARIKIRI. Y yo por broma robé la anguila. Por eso Hyoju no pudo darle a su madre de comer la anguila. Y ella murió sin comer la anguila. Pienso que ella murió pensando, “Quiero comer anguila. Quiero comer anguila”. Y yo no debí haber hecho aquella broma».

20

3

(1) Hyoju estaba lavando trigo junto al pozo rojo.

Hasta entonces, él había vivido pobremente junto a su madre y ahora que ella murió Hyoju estaba solo. Gon estaba mirando desde detrás del cobertizo y
25 pensó: «Hyoju está solo como yo».

(2) Cuando Gon salió de las cercanías del depósito, intentando irse hacia otro sitio, escuchó una voz procedente de algún lado vendiendo pescado:

«¡Miren, sardinas! ¡Sardinas frescas y baratas!»

30

(3) Gon corrió hacia la zona de donde provenía la voz animada del pescador. En ese momento la esposa de Yasuke apareció en la puerta, pidiendo:

«Deme unas sardinas».

El pescador dejó el carro cargado de cestos llenos de sardinas en la orilla del
35 camino. Y agarrando algunas sardinas frescas en cada mano, entró en la casa de Yasuke.



- ごんは、その すき間に、かごの 中から 五、六匹きの イワシを つかみ出して、もと 来た 方へ かけだしました。そして、兵十の うちの うら口から、うちの 中へ イワシを 投げこんで、あなへ 向かって かけもどりました。
- とちゅうの 坂の 上で ふり返ってみますと、兵十が まだ、井戸の ところ
5 ろで 麦を といでいるのが 小さく 見えました。
- (4) ごんは、ウナギの つぐないに、まず 一つ、いい ことを したと 思いました。
- 10 (5) 次の 日には、ごんは 山で くりを どっさり 拾って、それを かかえて 兵十の うちへ 行きました。
- (6) うら口から のぞいてみますと、兵十は、昼飯を 食べかけて、茶わんを 持ったまま、ぼんやりと 考えこんでいました。変な ことには、兵十の ほつ
15 ぺたに、かすりきずが ついています。どう したんだろうと、ごんが 思っていますと、兵十が ひとり言を 言いました。
- 「いったい、だれが、イワシなんかを、おれの うちへ ほうりこんでいったん
だろう。おかげで おれは、ぬすびとと 思われて、イワシ屋の やつに ひど
い 目に あわされた。」
20 と、ぶつぶつ 言っています。
- (7) ごんは、これは しまったと 思いました。「かわいそうに 兵十は、イワシ屋に ぶんなぐられて、あんな きずまで つけられたのか。」
- 25 (8) ごんは こう 思いながら、そっと 物置の 方へ 回って、その 入り口に くりを 置いて 帰りました。
- (9) 次の 日も、その 次の 日も、ごんは、くりを 拾っては 兵十の うちへ 持ってきてやりました。その 次の 日には、くりばかりでなく、まつたけも 二、
30 三本、持っていきました。



- En este intervalo, Gon agarró 5 o 6 sardinas de la canasta y corrió hacia la zona de donde había venido. Lanzó las sardinas hacia la casa de Hyoju desde la puerta trasera y regresó corriendo hacia el hueco.
- Desde la cima de la colina en el camino de regreso, Gon pudo ver la pequeña
5 figura de Hyoju todavía lavando cebada junto al pozo.
- (4) Gon pensó que había hecho una buena acción para reparar el mal causado al tirar la anguila de Hyoju.
- 10 (5) Al día siguiente Gon recogió muchas castañas en el bosque y las llevó a la casa de Hyoju.
- (6) Mirando desde la puerta trasera, Hyoju estaba iniciando su almuerzo, pero tenía el tazón pensativo y estaba distraído. Era raro, pero en la mejilla
15 de Hyoju había un rasguño. Gon estaba pensando qué podría haber pasado cuando escuchó a Hyoju murmurar para sí mismo:
«Quién será que lanzó las sardinas a mi casa? Gracias a eso el pescador pensó que yo soy un ladrón y me dio una paliza».
- 20 (7) Gon pensó: «Dios mío, al pobre de Hyoju el pescador le dio una paliza y está herido».
- (8) Gon muy calmado, dio la vuelta en dirección al cobertizo, colocando en la entrada las castañas y se marchó.
- 25 (9) Durante 2 días seguidos, Gon recogió y llevó castañas a la casa de Hyoju. En el tercer día aparte de las castañas llevó 2 o 3 setas MATSUTAKE.



4
 (1) 月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山
 様のおしろの下を^{すこ}通って、少し行くと、細い道の向こうから、だれか
 来るようです。話し声が聞こえます。チロリン、チロリンと、松虫が鳴いてい
 5 ます。

(2) ごんは、道のかたがわにかくれて、じっとしていました。話し声は、
 だんだん近くなりました。それは、兵十と、加助と、いうお百姓でした。

「そうそう、なあ、加助。」

10 と、兵十が言いました。

「ああん。」

「おれあ、このごろ、とても不思議なことがあるんだ。」

「何が。」

15 「おっかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれにくりや松たけな
 んかを、毎日毎日くれるんだよ。」

「ふうん。だれが。」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに置いていくんだ。」

(3) ごんは、二人の後をつけていきました。

20 「ほんとかい。」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。そのくりを見
 せてやるよ。」

「へえ、変なこともあるもんだなあ。」

25 (4) それなり、二人はだまって歩いていきました。

(5) 加助が、ひよいと後ろを見ました。ごんはびっくりして、小さくなっ
 て立ち止まりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさ
 と歩きました。吉兵衛と、いうお百姓のうちまで来ると、二人はそこ
 30 へ入っていきました。

4

(1) Era una hermosa noche de luna. Gon salió a pasear. Pasó por debajo del
 castillo del señor feudal Nakayama y desde un camino estrecho por delante
 parecían venir algunas personas. Se escuchaba las voces de las personas
 5 conversando. Los grillos MATSUMUSHI estaban cantando.

(2) Gon se escondió en uno de los lados del camino y permaneció quieto. Las
 voces de las personas conversando se acercaban cada vez más. Eran Hyoju y
 el agricultor Kasuke.

10 «Kasuke, quiero decirte algo», dijo Hyoju.

«Sí, ¿qué será?»

«Últimamente me está pasando algo muy extraño.»

«¿Qué es?»

«Después de la muerte de mi madre, no sé de quién, pero todos los días

15 recibo castañas y setas.»

«¿Quién podrá ser?»

«Ni idea, pero viene deja las castañas y las setas, luego desaparece.»

(3) Gon los siguió.

20 «¿De verdad?»

«¡Sí, es verdad! Si no me crees, ven mañana y así te mostraré las castañas.»

«¡Qué cosa más extraña!»

(4) Y los dos siguieron caminando silenciosamente.

25

(5) De pronto Kasuke miró hacia atrás. Gon se llevó un gran susto, encogiendo
 el cuerpo y se quedó quieto. Kasuke no se dio cuenta de la presencia de Gon
 y continuó caminando rápidamente. Al llegar a la casa del agricultor Kichibei,
 los dos ingresaron a la casa.



ポンポンポンと、木魚の音がしています。
 まどのしょうじに明かりが差していて、大きなぼうず頭がうつって、
 動いていました。ごんは、「お念仏があるんだな。」と思いながら、井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど人が連れ立っ
 5 て、吉兵衛のうちへ入って行きました。
 おきょうを読む声が聞こえてきました。

5

(1) ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。
 10 兵十と加助は、またいっしょに帰って行きます。ごんは、二人の話を
 聞こうと思っ、ついて行きました。兵十のかげぼうしをふみふみ行
 きました。

(2) おしろの前まで来たとき、加助が言いました。

15 「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」

「えっ。」
 と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

(3) 「おれはあれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃ
 20 ない、神様だ。神様が、おまえがたった一人になつたのをあわれに思
 わっしゃって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」

「そうかなあ。」
 「そうだと。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」
 「うん。」

25 (4) ごんは、「へえ、こいつはつまらないな。」と思っ、おれがくり
 や松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、
 神様に「お礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ。」

Desde dentro se escuchaba el sonido del tambor MOKUGYO.

A través de la ventana de papel con la luz interior, se veía la sombra móvil de la gran cabeza rapada del monje en su oración. Pensando: «Está orando», Gon se agachó cerca del pozo. Algún tiempo después llegaron tres personas más e
 5 ingresaron a la casa de Kichibei.

Se escuchó el canto de las escrituras budistas.

5

(1) Gon permaneció agachado cerca del pozo hasta terminar la oración. Hyoju
 10 y Kasuke se regresaron juntos. Queriendo escuchar la conversación de los dos, Gon siguió en la sombra de Hyoju, paso a paso.

(2) Cuando estaban frente al castillo, Kasuke empezó a decir:

«Sobre lo conversado anteriormente, pienso que es una acción de Dios».

15 «¿Cómo?» replicó Hyoju con cara de sorprendido, mirando a Kasuke.

(3) «Yo estaba pensando y lo que está pasando no es obra de una sola persona. ¡Pienso que es de Dios! Como usted está solitario ahora, Dios se compadeció de usted y ahora le envía regalos».

20 «¿Usted realmente piensa así?»

«Absolutamente y por eso debes agradecer a Dios todos los días».

«Así lo haré».

(4) Gon se sintió decepcionado. «Yo estoy llevando las castañas y setas, y no se
 25 me reconoce. Todas las gratitudes son para Dios. Esto no encaja bien», pensó Gon.



6
 (1) その 明くる 日も、ごんは、くりを 持って、兵十の うちへ 出かけました。兵十は、物置で なわを なっていました。それで、ごんは、うちの うら口から、こっそり 中へ 入りました。

5
 (2) その とき 兵十は、ふと 顔を 上げました。と、キツネが うちの 中へ 入ったでは ありませんか。こないだ、ウナギを ぬすみやがった あの ごんぎつねめが、また いたづらを しに 来たな。
 「ようし。」

10
 (3) 兵十は 立ち上がって、なやに かけてある 火なわじゅうを 取って、火薬を つめました。そして、足音を しのばせて 近よって、今、戸口を 出ようと する ごんを、ドンと うちました。

15 (4) ごんは、ばたりと たおれました。

(5) 兵十は かけよってきました。うちの 中を 見ると、土間に くりが 固めて 置いてあるのが、目に つきました。

「おや。」

20 兵十は びっくりして、ごんに 目を 落としました。
 「ごん、おまえだったのか、いつも、くりを くれたのは。」

(6) ごんは、ぐったりと 目を つぶった まま、うなずきました。
 兵十は、火なわじゅうを ばたりと 取り落としました。青い けむりが、まだ つつ口から 細く 出ていました。



6
 (1) Al día siguiente Gon llevó nuevamente las castañas y setas a la casa de Hyoju. Hyoju estaba tejiendo una cuerda en el cobertizo. Entonces Gon entró por la puerta trasera.

5
 (2) En ese momento Hyoju levantó la cabeza y de repente vio que un zorro estaba dentro de su casa. Inmediatamente pensó que Gon, quien le había robado la anguila, había regresado otra vez para hacer alguna travesura y se dijo: «Espera y verás».

10
 (3) Hyoju se levantó, trajo una escopeta del granero y le puso pólvora. Cautelosamente Hyoju se acercó a Gon. Justo cuando Gon intentaba salir por la puerta, Hyoju disparó.

15 (4) Gon fue alcanzado y cayó al suelo.

(5) Cuando Hyoju llegó cerca de Gon y miró dentro de la casa, se dio cuenta de que en la cocina tenía un montón de castañas amontonadas.

«¿Qué es esto?»

20 Hyoju estaba sorprendido y sus ojos se fijaron en Gon.
 «¡Gon! Eras tú quien todo este tiempo me traía las castañas».

(6) Gon con los ojos cerrados, debilitado, asintió afirmativamente. Hyoju soltó la escopeta, que aún emitía líneas de humos azules.

Traducido por Hisashi IWAMATSU/ Hatsuo IWAMATSU

5 クモの糸

Hilo de araña

あくたがわりゅうのすけ さく
芥川龍之介 作

Cuento : Ryunosuke AKUTAGAWA

よしだ けいいちろう え
吉田 圭一郎 絵

Ilustración : Keiichiro YOSHIDA



1

(1) ある 日の ことで ございます。お釈迦様は 極楽の 蓮池の ふちを、
ひとりで ぶらぶら お歩きの になっていらっしゃいました。

池の なかに 咲いている 蓮の 花は、みんな 玉のように まっ白で その
5 まん中に ある 金色の ずいからは、なんとも いえない よい 匂いが たえ
間なく あたりへ あふれております。極楽は ちょうど 朝なので ございま
しょう。

(2) やがて お釈迦様は その 池の ふちに おたたずみに になって、水の
10 面を おおっている 蓮の 葉の 間から、ふと 下の 様子を ご覧に なりま
した。

この 極楽の 蓮池の 下は、ちょうど 地獄の 底に あたっておりますから、
水晶のような 水を すき通して、三途の 川や 針の 山の 景色が、ちょう
ど のぞき眼鏡を 見るように、はっきりと 見えるので ございます。

15

(3) すると その 地獄の 底に、犍陀多と いう 男が 一人、他の 罪人と
一緒に うごめいている 姿が、お目に とまりました。

この 犍陀多と いう 男は、人を 殺したり 家に 火を つけたり、いろい
ろ 悪事を はたらいた 大どろぼうで ございますが、それでも たった一つ、
20 よい ことを いたした 覚えが ございます。

と 申しますのは、ある 時 この 男が 深い 林の 中を 通りますと、小
さな クモが 一匹、道ばたを はっていきのが 見えました。そこで 犍陀多
は 早速 足を 上げて、踏み殺そうと いたしましたが、「いや、いや、これも
小さいながら、命の ある ものに ちがいない。その 命を むやみに とると
25 いう ことは、いくら なんでも かわいそうだ。」と、こう 急に 思い返して、
とうとう その クモを 殺さずに 助けてやったからで ございます。

1

(1) Cierta día, Buda deambulada en solitario por las orillas del lago del loto en el paraíso.

Las flores de loto que florecían en el lago eran todas de un blanco puro como las perlas y constantemente desprendían un olor indescriptiblemente delicioso de los estambres de oro en sus centros. Es una mañana en el paraíso.

(2) Después de un rato Buda se detuvo un instante en las orillas del lago y vio el mundo de abajo a través de un pequeño espacio en la superficie cubierta por las hojas del loto. Debajo del lago de loto del paraíso se ubicaba el fondo del infierno.

Así, a través de las aguas cristalinas y transparentes se veía claramente el paisaje del río de los tres infiernos y de la montaña de las agujas, como si se estuviera mirando a través de un lente.

15

(3) Su mirada se dirigió hacia un hombre llamado Kandata que se retorció en el fondo del infierno junto a otros pecadores.

Kandata era un peligroso criminal que había hecho muchas maldades, matando personas e incendiando casas. Pero en cierta ocasión este hombre había realizado una buena acción.

Cuando andaba en lo profundo del bosque, Kandata vio una pequeña araña en el borde del camino. Fue cuando levantó rápidamente su pie para pisotearla, pero de repente pensó, «La araña es un ser vivo, a pesar de ser de pequeño tamaño. Sería una crueldad de mi parte tomar esa vida sin razón». Pensando de esta manera decidió salvar a la araña en lugar de matarla.



(4) お釈迦様は地獄の様子をご覧になりながら、この犍陀多にはクモを助けたことがあるのを思い出しになりました。

そうしてそれだけのよいことをした報いには、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。

5 幸い、そばをみますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽のクモが一匹、美しい銀色の糸をかけております。

お釈迦様はそのクモの糸をそっとお手にお取りになって、玉のような白蓮の間からはるか下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお下ろしなさいました。

10

2

(1) こちらは地獄の底の血の池で、他の罪人と一緒に、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございます。なにしろどちらを見ても、まっ暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上がっているものがある
15 とおもいますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらございません。そのうえあたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞こえるものといっは、ただ
20 罪人がつくかすかなため息ばかりでございます。

これはここへ落ちてくるほどの人間は、もうさまざまな地獄の責め苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでござい
20 しょう。ですからさすが大どろぼうの犍陀多も、やはり血の池の血にむせびながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかり
おりました。



(4) Buda, viendo el estado del infierno, recordó que Kandata había salvado una araña.

Para compensar el bien que había practicado, pensó salvarlo del infierno de ser posible.

5 Por coincidencia, mirando a su alrededor, Buda se fijó en una araña del paraíso haciendo la tela de araña de unos hermosos hilos plateados encima de una hoja de loto de color jade.

Tomando cuidadosamente un solo hilo de la tela de esa araña en su mano, deslizó el hilo hacia el fondo del infierno entre los lotos blancos perlados.

10

2

(1) En el fondo del infierno, Kandata y otros criminales estaban flotando y hundiéndose en el lago de sangre. Mirándose de cualquier lado, el infierno era totalmente oscuro y a veces parecía que en la oscuridad había un bulto
15 flotando vagamente y en realidad era el destello de las montañas horribles de agujas. ¡Qué desesperado se sentía Kandata por todo esto! Además, alrededor era un silencio total como si estuviera dentro de un cementerio y de vez en cuando se oía solamente ligeros suspiros de los criminales.

Porque las personas que caían allí ya estaban cansadas de varias torturas
20 y no tenían más fuerzas para llorar. Por eso, el gran ladrón Kandata también se encontraba sofocado en el lago de sangre y se retorció de dolores como si fuera un sapo al borde de la muerte.



(2) ところが ある 時の ことで ございます。なにげなく 韃陀多が 頭を
 上げて、血の 池の 空を 眺めると、その ひっそりと した 闇の 中を、
 遠い 遠い 天上から、銀色の クモの 糸が、まるで 人目に かかるのを 恐
 れるように、一筋 細く 光りながら、するすると 自分の 上へ たれてまいる
 5 では ございせんか。韃陀多は これを 見ると、思わず 手を 打って 喜び
 ました。

この 糸に すがりついて、どこまでも 上っていけば、きっと 地獄から 抜
 け出せるのに 相違 ございせん。

いや、うまく いくと、極楽へ 入る ことさえも できましよう。そう すれば、
 10 もう 針の 山へ 追い上げられる ことも なくなれば、血の 池に、沈められ
 る ことも あるはずは ございせん。

(3) こう 思いましたから 韃陀多は、早速 その クモの 糸を 両手で
 しっかりと つかみながら、一生懸命に 上へ 上へと たぐり 上り始めました。
 15 もとより 大どろぼうの ことで ございますから、こう いう ことには 昔か
 ら、なれきっているの で ございます。

しかし 地獄と 極楽との 間は、何万里と なく ございますから、いくら
 あせってみた ところで、容易に 上へは 出られません。

やや しばらく 上る うちに、とうとう 韃陀多も くたびれて、もう 一た
 20 ぐりも 上の 方へは 上れなくなっていました。

そこで 仕方が ございせんから、まず 一休み 休む つもりで、糸の
 中途に ぶら下がりがりながら、はるかに 目の 下を 見下ろしました。



(2) Sin embargo, un día por accidente Kandata levantó la cabeza y miró
 hacia el cielo del lago de sangre. Desde el paraíso muy lejano en la oscuridad
 silenciosa, vio un hilo plateado de araña, que parecía temeroso en ser
 percibido, bajando en la dirección hacia él. Al ver esa escena, Kandata,
 5 involuntariamente hizo palmas de alegría.

Agarrándose del hilo, si consiguiera subir hasta la cima, con seguridad
 saldría del infierno.

Entonces, si todo marchaba bien, incluso podría ingresar al paraíso. Luego,
 nunca más sería perseguido en las montañas de agujas ni ahogado en el lago
 10 de sangre.

(3) Pensando así, Kandata se aferró inmediatamente al hilo de araña
 con ambas manos con firmeza y comenzó a subir con mucho esfuerzo.
 Kandata, que había sido un gran ladrón desde los tiempos antiguos, estaba
 15 acostumbrado a enfrentar dificultades.

Sin embargo, la distancia del infierno hacia el paraíso es millares de
 kilómetros, por eso no había que precipitarse, pues no sería nada fácil
 alcanzar la meta.

Después de haber subido por un tiempo, Kandata ya se encontraba cansado
 20 y no lograba subir más.

No existiendo otra opción, decidió descansar un poco y colgando desde la
 mitad del hilo, miró hacia abajo, muy lejos.



(4) すると、一生懸命に上ったかいがあって、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう闇の底にいつの間にか隠れております。それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になってしまいました。

5 このぶんで上っていけば、地獄から抜け出すのも、存外わけがないかもしれません。韃陀多は両手をクモの糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。

ところがふと気がつきますと、クモの糸の下の方には、数かぎりもない罪人たちが、自分の上った後をつけて、まるでアリの行列のよう

10 に、やはり上へ上へ一心によじ上ってくるではございませんか。

韃陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開いたまま、目ばかり動かしておりました。

自分一人ですえ切れそうな、この細いクモの糸が、どうしてあれだけの人数の重みにたえることができましょう。

15 もし、万一途中で切れたといたしましたら、せっかくここまで上ってきたこのかんじんな自分までも、もとの地獄へ逆落としに落ちてしまわなければなりません。そんなことがあったら、大変でございます。

が、そういううちにも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよとはい上がって、細く光っているクモの

20 糸を、一列になりながら、せつせと上ってまいります。

今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに切れて、落ちてしまうのにちがいません。

そこで韃陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。このクモの糸は俺のものだぞ。おまえたちはいったい誰に聞いて、上ってきた。下

25 りろ。下りろ。」とわめきました。



(4) El esfuerzo estaba dando sus frutos, el lago de sangre se perdía en el fondo de la oscuridad, así como las montañas de agujas.

A este ritmo, no sería difícil escapar del infierno después de todo. Kandata, agarrando el hilo de araña con ambas manos, se rió de alegría por primera vez en quién sabe cuántos años desde que vino al infierno y terminó gritando: «¡Qué bueno! ¡Qué bueno!»

De pronto, Kandata se dio cuenta de que en la parte inferior del hilo de araña un número infinito de criminales subían, siguiéndole como si fuera una fila de hormigas.

10 Al ver esta escena, quedó sorprendido y aterrorizado con la boca muy abierta durante un instante con los ojos parpadeando mucho.

El hilo de araña que era muy delgado parecía romperse incluso por el propio peso de Kandata. Luego, ¿cómo podrá soportar el peso de tantas personas?

Si el hilo de araña se rompiera por la mitad, el mismo Kandata que ya estaba 15 a medio camino terminaría cayendo de cabeza, nuevamente al infierno. No podía permitir que eso pasara.

Mientras tanto, a través del brillante hilo de araña, centenares y millares de criminales venían ascendiendo desde el fondo del oscuro lago de sangre, sin detenerse, formando una infinita fila.

20 Necesitaba hacer algo inmediatamente, si no el hilo se rompería y todos caerían.

Entonces Kandata gritó en voz alta: «¡Oigan, ustedes criminales! El hilo de araña es mío. ¿Quién les dio permiso para subir por él? ¡Bajen, bajen ahora mismo!»



(5) その とたんで ございます。今まで なんとも なかった クモの 糸が、
急に 鞞陀多の ぶら下がっている 所から、ぶつりと 音を たてて 切れまし
た。

ですから 鞞陀多も たまりません。あっと いう まも なく 風を 切って、
5 こまのように くるくると 回りながら、みるみる うちに 闇の 底へ、まっ逆
さまに 落ちてしまいました。

あとには ただ 極楽の クモの 糸が、きらきと 細く 光りながら、月も
星も ない 空の 中途に、短く たれているばかりで ございます。

10 3

(1) お釈迦様は 極楽の 蓮池の 縁に 立って、この 一部始終を じっと
見ていらっしゃいましたが、やがて 鞞陀多が 血の 池の 底へ 石のように
沈んでしまいますと、悲しそうな お顔を なさりながら、また ぶらぶら お歩
きに なり始めました。自分ばかり 地獄から 抜け出そうと する、鞞陀多の
15 無慈悲な 心が、そう して その 心 相当な 罰を 受けて、もとの 地獄へ
落ちてしまったのが、お釈迦様の お目から 見ると、あさましく おぼしめされ
たので ございましょう。

(2) しかし、極楽の 蓮池の 蓮は、少しも そんな ことには 頓着いたしま
20 せん。その 玉のような 白い 花は、お釈迦さまの おみ足の 回りに、ゆらゆ
ら うてなを 動かして、その まん中に ある 金色の ずいからは、なんとも
いえない よい 匂いが 絶え間 なく 辺りへ あふれております。極楽も
う 昼に 近くなったので ございましょう。



(5) Entonces el hilo de araña que hasta el momento no daba signos de romperse se rompió justo encima de la cabeza de Kandata.

Ya no podía hacer nada, terminó cayendo de cabeza, girando en la inmensa oscuridad fue su cuerpo hacia abajo.

5 En medio del cielo oscuro quedó ondeando el único brillante hilo de araña del paraíso sin luna ni estrellas.

3

(1) Buda, de pie en las orillas del lago del loto en el paraíso, presenció toda
10 esta escena. Cuando Kandata se hundió en el lago de sangre como una piedra, volvió a caminar con el rostro entristecido. A Buda, Kandata debe de haberle parecido sórdido. Kandata deseaba salir del infierno solo sin tener compasión de los demás. Ese corazón egoísta y despiadado suyo lo había condenado a caer en el infierno.

15

(2) Las flores de loto del lago en el paraíso no prestaban atención a todo lo que había acontecido. A los pies de Buda, las flores blancas como las perlas se balanceaban suavemente y desde el centro de sus estambres dorados, emitían constantemente un indescriptible y agradable aroma. En el paraíso, el
20 mediodía ya estaba cerca.

Traducido por Hisashi IWAMATSU/ Hatsuo IWAMATSU

6 マカフシギ物語^{ものがたり}

El ave misteriosa

ふなざき よしひこ みま ゆきこ さく
舟崎 克彦・三間 由紀子 作

Cuento : Yoshihiko FUNAZAKI / Yukiko MIMA

ふなざき よしひこ え
舟崎 克彦 絵

Ilustración : Yoshihiko FUNAZAKI

ノベヤマさんは^{うちゅうひこうし}宇宙飛行士です。

その^{よる}夜、ノベヤマさんは^{こうど}高度^{にまん}二万キロメートルの^{そら}空の^{かなた}かなたから、
^{ちきゅう}地球に^{むけて}むけて^{カメラを}カメラを^{セット}セットしていました。

なんでも^ひその^{りゅうせい}日は、流星の^{あめ}雨が^{たくさん}たくさん^{ふる}ふる、と^{いう}のです。

5 その^{ようす}ようすを、^{さつえい}さつえいするのが、ノベヤマさんの^{しごと}しごとでした。

(1) ^{なが}けれど、^{ぼし}流れ星は、^{いっこう}いっこうに^{あられ}あられません。

ノベヤマさんは^{ねむ}ねむ^けぎざましに、^{あじけ}あじけない^{うちゅう}宇宙ラーメンを^{すすり}すすりました。

その^{とき}とき、^{うちゅうせん}宇宙船の^{すぐ}すぐ^{わき}わきを、^{まぶしい}まぶしい^{ひかり}光の^{おび}おびが、^{すりぬ}すりぬけていっ
10 たのです。

ノベヤマさんは、ラーメンの^{カップ}カップを^{ほうり}ほうりだすと、^{あわて}あわてて^{ビデオ}ビデオカメラの^{スイッチ}スイッチを^{おし}おしました。

^{ひかり}光は、^{はるか}はるか^{かなた}かなたで^{どす}どす^{くろ}黒い^{スモッグ}スモッグに^{つつま}つつま^{れた}れた^{ちきゅう}地球^{めざ}めざして、
いっさんに^と飛びさりました。

15 (2) ^{ぼし}星の^{あめ}雨が^{あと}あとに^{つづく}つづくかと、^{まち}まちかまえていますと、^{それ}それきり。^{あたり}あたりは^{ふかい}ふかい^{やみ}やみに^{もど}もどります。

「^{なんだ}なんだ、^{いっこ}一個きりか…。」

ノベヤマさんは^{がっかり}がっかりして、^{うちゅうゆうえい}宇宙遊泳している^{ラーメン}ラーメンを^{つかま}つかまえました。

20 「^{それに}それにしても、^どどでかい^{なが}流れ星^{ぼし}だったなあ…。」

(3) ^ビビ、^ビビ、^ビビ、^ビビ…。

モニターテレビが^な鳴って、^{さっき}さっき^{さつえい}さつえいした、^{なが}流れ星の^{えいぞう}映像を^{さいせい}再生し
ます。ノベヤマさんは、^{たべ}たべの^{こし}こしの^{ラーメン}ラーメンの^{スープ}スープを^{ストロー}ストローで^飲飲

25 ^みみながら、^{それ}それに^め目を^やや^{った}ったと^{たん}たん、^{また}また、^{カップ}カップを^{ほうり}ほうりだす^ははめに
なりました。そこに^{うつ}うつっていたのは、^{ぼし}星かと^{おも}思いきや、^{いち}一羽の、^み見た^{こと}ことも
ない^{とり}鳥の^{すがた}すがた^{だけ}だけ^たた^{った}ったのです。



El señor Nobeyama es un astronauta.

Aquella noche, él se encontraba ajustando la cámara en dirección hacia la Tierra desde una altitud de veinte mil kilómetros, mucho más allá del cielo.

Estaba previsto una lluvia de meteoritos para ese día.

5 El trabajo del señor Nobeyama era grabar esto en vídeo.

(1) Esperando, no aparecía ningún meteorito.

El señor Nobeyama empezó a comer una sopa de fideos de astronautas para mantenerse despierto.

10 En ese momento una ráfaga de luz brillante pasó muy cerca de la estación espacial.

El señor Nobeyama dejó a un lado su sopa de fideos de astronautas y presionó inmediatamente el interruptor de la videocámara.

15 El destello de luz se dirigió directamente hacia la Tierra lejana que estaba cubierta de un espeso y negro smog.

(2) Pensando que la lluvia de meteoritos seguiría, él se quedó esperando atentamente pero no apareció nada y nuevamente se quedó rodeado por una absoluta oscuridad.

20 «¡Ah, solo eso!»

Decepcionado el señor Nobeyama, cogió su sopa de fideos que flotaba dentro de la nave espacial.

«Aun así, ¡qué grande que era ese meteorito!»

25 (3) Bip, bip, bip, bip...

El monitor sonó y se inició la reproducción de la imagen del meteorito grabada justo ahora. El señor Nobeyama estaba terminando su sopa de fideos con una pajita. Cuando vio la imagen grabada, soltó nuevamente el recipiente de la sopa de fideos. Él estaba pensando que había grabado la imagen del
30 meteorito, pero realmente era la imagen de un ave que jamás se había visto.



(4) 黄金の鳥でした。

「そんな バカな…。いくら なんでも、こんな 宇宙空間を 鳥が 飛ぶなんて…。」

ノベヤマさんは 頭を ぶるぶると ふると、その 画像を さっそく 地球の 基地に 送りました。

「これは グリニッチ 標準時 0430に そちらへ むかった 流れ星です。正体を 確認してください。」

(5) ノベヤマさんが ラーメンを やっと 食べ終わった ころ、地上から 返事が きました。

「その 流れ星は 地球からは 観測できませんでした。きっと 軌道を はずれたのでしょう。」

「では、光の 中に うつつていた 鳥の すがたは、どう はんたんしますか？」

ノベヤマさんが たずねますと、

「なにも うつつとらん。」そっけない 答えが かえってきました。

(6) 「まさか…。」

ノベヤマさんは、もう 一度 テープを まきもどして、さっきの 流れ星を モニターに うつしました。すると、どう いう ことでしょうか、さっきは たしかに うつつていた 鳥の すがたが、かげも かたちも ないのです。

(気の せいだろうか … いや … しかし … そうだったのかも しれない。)



(4) Era un ave dorada.

«¡Qué absurdo! ¡No puedo creerlo! ¿Un pájaro volando en el espacio cósmico?»

Sacudió vigorosamente la cabeza e inmediatamente envió la imagen a la base terrestre.

«Esta imagen de meteorito pasó en dirección hacia la Tierra a las 0430 hora de Greenwich. Por favor verifiquen la imagen».

(5) Cuando el señor Nobeyama terminó su sopa de fideos, llegó la respuesta de la Tierra.

«No se pudo detectar el ingreso del meteorito a la Tierra, seguramente se desvió su órbita».

«Y ¿qué me dicen de lo que había la forma de pájaro dentro de la luz?»

Preguntó el señor Nobeyama.

«No tenemos ninguna imagen». Fue la áspera respuesta que recibió.

(6) «Eso no es posible...»

El señor Nobeyama rebobinó la cinta y mostró el meteorito en el monitor. Grande fue su sorpresa, pues no quedaba la imagen del pájaro que hace un momento había estado ahí.

«¿Será que fue solo mi imaginación? No.. pero.. tal vez fue eso».



(7) 流星雨は なかなか あらわれません。

ノベヤマさんは、もうれつに ねむくなってきました。

「ちょっと 休もう…。」

だれかに しごとを たのもうにも、その 宇宙船には、ノベヤマさん ひとり

5 しか 乗っていないのです。

ノベヤマさんは カメラを 自動に 切りかえると、かたわらの ベッドに 横
に なりました。

(8) なんて ここちよい ねむりだった ことでしょう。宇宙飛行士とも なる
10 と、かぞえきれないほどの 機械を、四六時中 あつかっていないくては なりません。
とても くだびれるのです。

ノベヤマさんは 嵐のような いびきを かいて、ねむりこんでしまいました。

(9) が、その とき、宇宙船には なぞの 通信が 送りこまれていたのです。

15 「わたしは あなたの 船から 通信された 電波を 傍受した 者です。あなた
が 送った 流れ星の 画像は、たしかに 鳥であります。しかし、それは
地球上に いる 鳥では ない。この 鳥は 紀元前 二百年 前に、ギリシャ
の 博物学者 ノラステルダマスの 本の中に 登場する 霊鳥類 マカシ
20 ギ科に 属する マカフシギと いう シギの 一種に ちがい ありません。」

(10) 「ノラステルダマスは、つぎのように 記しています。『マカフシギ、天よ
り きたる とき、地上には おびただしい 異変が おきるであろう。しかし
て この 鳥が さった のちに、人類は もっとも たいせつな 友人を う
25 しなうのである。それは 人間が、地球を そまつに あつかった むくいであ
ると 知れ。』」

メールの おわりには、マカフシギの 古い イラストの コピーも ついてい
ました。



(7) Después, otra lluvia de meteoritos no apareció.

El señor Nobeyama estaba tan somnoliento.

«Voy a descansar un poco...»

Recibir ayuda de alguien era imposible, ya que él era un solitario astronauta

5 espacial en su nave.

Colocando la cámara en automático, se dejó caer en la cama.

(8) ¡Qué cómodo estaba el dormir en la cama! Los astronautas todo el tiempo
deben operar innumerables máquinas. Esto es un trabajo muy agotador.

10 Se quedó profundamente dormido, roncando como un trueno.

(9) Pero en ese momento, se había enviado un extraño mensaje para la nave
espacial.

15 «Yo soy quien intercepto la señal que envió a la Tierra. Ciertamente la
imagen del meteorito era la de un pájaro. Sin embargo, ese pájaro no existe
en la Tierra. Es un pájaro Makafushigi que pertenece a la familia de las
aves sagradas sin ninguna duda. Forma parte de las especies de las aves
agachadizas que aparece en el libro por el naturalista griego Norasteldamas
que fue escrito doscientos años antes de Cristo».

20

(10) «En el libro de Norasteldamas, se describe de la siguiente manera:
“Cuando Makafushigi desciende de los cielos, extraños y numerosos cambios
se producen en la Tierra. Los seres humanos perderán a sus amigos más
importantes. Este castigo es por lo mal que los seres humanos han tratado la
25 Tierra”».

Al finalizar el correo electrónico se adjuntaba una imagen de Makafushigi.



(11) そんな こととも しらず、ノベヤマさんは、^{おおぐち}大口を あげ、よだれを たらしながら、^{うちゅう}宇宙では ^た食べられない ^{うな}ウナ丼と、^{どん}寿司と、^{すし}おでんと、^{ちゃ}シャケ茶 づけの ゆめを ^み見ていました。

そして、その ころ、はるか ^{ちきゅう}地球では ^{よげん}ノラステルダマスの 予言どおり、
5 ^{しん}信じられない できごとが おきていたのです。

(12) ポーランドの かたいなかで ^{がっこう}学校の ^{きょうし}教師を している ジョゼフ・クラ ウスナーさんは、^{あさ}朝 起きて、いつものように すいそうの ミドリガメに エサ を やろうと した とたん、こしを めかしました。

10 なんと ミドリガメの マリアに まゆげが はえていたのです。

あつげに とられていると、マリアの ^{くち}口もとからは ^{みるみる}みるみる ふとい ひげ が のびてきて、

「しょくん！^た立ちあがれ。」

えんぜつを はじめたのです。

15

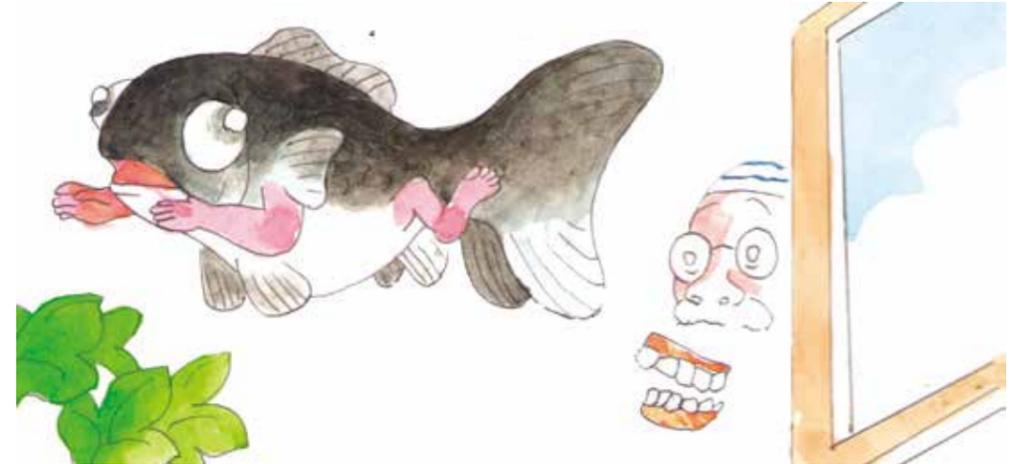
(13) つぎに、^{いへん}異変に ^き気づいたのは、スペインの マドリッドで ^{きんぎょ}金魚を そだ ている ^{としよかんいん}図書館員、フリオ・セルバンテスでした。

フリオさんは ^{でめきん}じまんの 出目金に、いつもどおり、

「おはよう。」

20 ^{こえ}声を かけた とたん、^い入れ歯を おとしました。

まっくろな ^{でめきん}出目金から、いつの まにか ^{てあし}ピンクの 手足が はえて、すいそ うの ^{なか}中を ^{ひらおよ}平泳ぎしているのみ ならず、まもなく ^{くうちゅう}空中に ^{およ}泳ぎだすと、あけ はなした まどから、どこかへ ^と飛んでいってしまったのです。



(11) Sin enterarse de esto, el señor Nobeyama dormía con la boca abierta y babeó, soñando con las deliciosas comidas que no le era posible saborear en el espacio, tales como arroz con anguila, sushi, oden, arroz con té verde y salmón.

5 En ese preciso momento se cumplía la profecía de Norasteldamas y cosas increíbles estaban pasando en la Tierra.

(12) En una remota zona rural de Polonia, el profesor Joseph Klausner, como de costumbre fue a alimentar a la tortuga verde que vivía en el acuario.

10 Cuando la vio, se llevó el susto más grande que se pudo imaginar y casi se cae hacia atrás.

Su pequeña tortuga verde, María tenía cejas.

Él estaba sorprendido. Una gran barba crecía alrededor de los labios de María en un abrir y cerrar de ojos y luego ella inició un discurso:

15 «¡Compañeros, de piel!»

(13) El siguiente en notar los cambios sobrenaturales fue el bibliotecario Julio Cervantes quien criaba un pecesito dorado y vivía en Madrid-España.

Como cada mañana, Julio dijo:

20 «¡Buenos días!»

Le dijo a su jactancioso pecesito, pero se le cayó la dentadura.

Su pecesito, que era de color negro, le habían salido manos y pies rosados. Él estaba nadando braza dentro del acuario, cuando de repente comenzó a nadar en el aire y salió volando por la ventana abierta.



(14) インドで 林業を ^{りんぎょう}いとnanでいる シャンカールさんは、切りだした ヤシを ^{しや}はこぶゾウたちのゾウ舎に ^きでかけて、「やだ、信じられない！」

ヒンディー語で ^ごひめいをあげました。

5 そこには、シッポと ^{はな}鼻が入れちがっているゾウたちが、「鼻」を ^{はな}ふりながら「シッポ」で ^{みず}水をのんでいたのです。

(15) 中国の ^{ちゅうごく}四川省に ^{しせんしょう}ある ^{どうぶつえん}動物園の ^{しいうがかり}飼育係、チュウさんは、パンダの ^{せわ}世話を ^{かかり}する ^{はな}係でした。いつものように ^はササの ^は葉を ^おかかえて ^お檻に ^{はい}はい

10 ると、そこには ^いいつもと ^{ぜんぜん}ぜんぜん ^{ちがう}ちがう ^{けもの}けものが ^{いた}いたのです。

とっさに ^{どこ}どこが ^{どう}どう ^{ちがう}ちがうのか、チュウさんは ^わわかりませんでした。が、しばらく ^{たつと}たつと、パンダの ^{しろくろ}白黒もようが、ぎゃくに ^ななっている ^{こと}ことに ^き気づいたのです。

15 (16) パンダだけでは ^ありません。ロシアの ^{さんみやく}ウラル山脈で ^{どうぶつちようさかん}動物調査官をしている、イワン・ウロンスキは ^ひその ^み日、^み見た ^{こと}ことも ^なない ^{もうじゅう}もうじゅうにおそいかかられました。

いのちからがら、^き木に ^よよじのぼって、その ^{けもの}けもの ^みを見ると、^{どう}どうやら ^{トラ}トラのようです。が、トラの ^{くろ}しまもようも ^{きいろ}黒と ^{いろ}黄色が、ぎゃくの ^{いろ}色に ^なな

20 ていたのです。



(14) El señor Shankar, quien era un trabajador forestal en la India, al llegar al establo de los elefantes, llevando las palmeras que había cortado abajo, gritó en hindi:

«¡Oh, no! ¡No puedo creerlo!»

5 Los elefantes tenían las trompas y colas intercambiadas, bebían con las “colas” y meneaban las “trompas”.

(15) El señor Chu, quien era el encargado de los animales del zoológico de la provincia de Sichuan en China, se encargaba del cuidado de los pandas.

10 Cuando ingresó a la jaula, llevando las hojas de bambú, como de costumbre, encontró a un animal completamente diferente.

El señor Chu inmediatamente no se dio cuenta donde estaba la diferencia. Pero, poco a poco fue identificando que los colores blanco y negro estaban invertidos.

15

(16) No era solamente los pandas. El señor Ivan Wronski, quien trabajaba como cazador de animales en los montes Urales de Rusia, fue atacado por una fiera, jamás antes vista.

20 Logró escapar de la muerte al trepar a un árbol. Observando atentamente a la fiera por la forma de ser, era un tigre. Solo que los colores amarillo y negro estaban también invertidos.



(17) トラと いえば、ライオンにも ^{へんか}変化が おきていました。
 アフリカの ゴロンゴロ ^{どうぶつこうえん}動物公園では おなじ ころ、とつぜん みょうな ^{どうぶつ}動物が あらわれたのです。全身が ^{ぜんしん}毛むくじゃらなのです。
 カモシカを おそうのですが、毛が ^{あし}足に からまって ^{はし}走る ことも できま
 5 せん。動物学者の ^{どうぶつがくしゃ}ンガイ・ワキマリ氏が ^ししらべてみると ^{しょうたい}正体は、^{からだじゅう}体中が た
 てがみだらけに なった ライオンでした。

(18) ^{なんべい}南米の ^{がわ}ブラジル—アマゾン川では ^{りょうし}こんなふうでした。
^{りょうし}漁師の ペドロ・ロペスが ^{ふね}いつものように ^だ舟を ^だ出すと、いつもの ^{わに}ワニの
 10 ^ばたまり場に なっている ^{いりえ}入江に、ワニが ^{いつとう}一頭も ^み見あたりません。
 ふしぎに ^{おも}思っ て ^{あた}あたりを ^ささがすと、なんと ^いいう ^{こと}ことか、ワニたちが
 いっせいに、^き木に ^{うた}よじのぼって、^{うた}歌を ^{うた}うたっていたのです。

(19) ^{にほん}日本の ^{とうきょうわん}東京湾では、^{うみ}海の ^{おせん}汚染を ^{せんすいふ}しらべていた ^{たなか}潜水夫の ^{たなか}田中
 15 ^{こうたろう}光太郎が、^{しん}信じられない ^{こうけい}光景に ^で出くわしました。
 ふかぶかと つもった ^{なか}ヘドロの ^{なか}中から、^かつぎつぎと ^{かい}貝たちが ^だとび出して
 きたのです。アサリ、ハマグリ、カラス貝 … ^{かい}貝たちは ^{てん}てんでに ^かからを ^はは
 ばたいては、^{うみ}どろを ^{うみ}まいあげて ^{うみ}海の上へ ^と飛びさって行くのです。そのよう
 すは、まるで ^みチョウチョウのように ^み見えました。

(20) ^{うみ}その ^{うみ}ころ ^で海に ^{せかい}出ている ^{せかい}世界じゅうの ^{ひと}人たちが ^{いき}息を ^ののんでおり
 ました。
 ウミガメが、マンボウが、サメが、クジラが、マンタが、トドや ^{あざらし}アザラシが、
 つまりは、^{うみ}海の中 ^{なか}で ^{くら}くらしている ^ああらゆる ^{いき}いきものたちが、^ひヒレを ^はは
 25 ^{そら}たいて、^{そら}空に ^だまい出し ^だはじめたのです。
 いちばん ^いいばっていたのは、ちっぽけな ^{とび}トビウオでしたけれど。



(17) Hablando del tigre, el león también estaba sufriendo cambios.
 Prácticamente al mismo tiempo, en el parque zoológico de Ngorongoro en
 África, de pronto apareció un extraño animal, que tenía el cuerpo totalmente
 peludo.
 5 Este trataba de cazar un antílope, pero los pelos se le enredaban en las
 patas, sin poder correr tras su presa. El zoólogo Ngai Wakimari investigó y
 descubrió que el animal era un león cuya melena había crecido y cubierto
 todo su cuerpo.

10 (18) En el río Amazonas dentro del territorio brasileño en Sudamérica ocurrió
 lo siguiente:
 Como de costumbre, el pescador Pedro López al colocar su barco en la
 ensenada donde se reúnen los cocodrilos, no encontró a ninguno de ellos por
 ahí.
 15 Encontrando raro, miró en los alrededores, viendo una escena increíble. Los
 cocodrilos estaban trepados a los árboles y al mismo tiempo empezaron a
 cantar.

(19) En la bahía de Tokio en Japón, el científico Kotaro Tanaka, quien se
 20 encontraba examinando la contaminación marítima, se encontró con una
 escena increíble.
 De los espesos lodos saltaban los mariscos unos tras otros. Almejas,
 mejillones, ostras... golpeaban sus conchas completamente desordenadas.
 Después de lanzar lodo hacia arriba, salieron volando hacia alta mar. Todo
 25 este espectáculo parecía ser como el vuelo de las mariposas.

(20) En ese preciso instante las personas del mundo que se encontraban en
 alta mar quedaron estupefactos con lo que estaban presenciando.
 Las tortugas marinas, los peces luna, los tiburones, las ballenas, las manta
 30 rayas, los leones marinos, las focas y aún más, todas las criaturas que habitan
 en el mar batían sus aletas y después comenzaban a bailar hacia el cielo.
 Dentro de estos, los más arrogantes eran los pequeños peces voladores.



(21) いっぽう、アメリカの アリゾナ砂漠では、とりわけ すごい 事が おきていました。

恐竜の 骨を 発掘していた 古生物学者、ジョン・カーペンターは、砂の
あちこちから むくむくと 起き出した 骨が、あつというまに より集まって
5 恐竜に なっていくのを見て、気を うしなってしまうた ものです。

(22) 「はっ…いけない！」

ノベヤマさんは、ゆめの なかで シャケ茶づけを たべおわった とたん、目を
さました。

10 あわてて 宇宙船の 外に 目を やります。

その とき、ノベヤマさんは 信じられない けしきを 目のあたりに したの
です。

(23) 目も くらむ ような 流星雨です。

15 それも 宇宙から 地球に 降るのでは なく、流れ星が、地球から 天空に
むかって つぎつぎに 飛びさっているでは ありませんか。

まだ、なぞの 通信に 目を とおしていない ノベヤマさんは、その 流星が
「地球を すてていく」「人間の 一番 たいせつな 友人」たちの すがただとは、
おも 思っても いませんでした。

20 流れ星は、人間いがいの すべての いきものたちに ほかなりませんでした。

(24) やがて 流星雨が おさまると、地球は くすんだ なまり色に かわりま
した。

すると、つぎに、地球に くねくねと 足が はえはじめます。

25 見るまに 地球は 一世界地図 もようの タコに 変身すると、ピュッと ス
ミを はいて、宇宙の かなたへ 飛んで 行ってしまったのです。

ノベヤマさんは、あわてて タコの あとを 追いかけてました。

「気づいた ときには おそすぎる。ノラステルダマス。」

通信には そんな ひとことが、書きたしてありました。

(おわり)



(21) Por otro lado, en el desierto de Arizona en los Estados Unidos, sucedía algo sorprendente.

El paleontólogo John Carpenter estaba excavando huesos de dinosaurios. Cuando vio que los huesos dispersos en la arena se levantaron formándose en
5 un dinosaurio en un abrir y cerrar de ojos y cayó desmayado.

(22) «¡Oh, no!»

Tan pronto como terminó el arroz con té verde y salmón en sus sueños, se despertó el señor Nobeyama.

10 Fue corriendo a observar por la ventana de la nave espacial.

En ese instante, el señor Nobeyama presenció una escena increíble.

(23) Era una sorprendente lluvia de meteoritos.

Además, en vez de caer hacia la Tierra, estas salían desde la Tierra hacia el
15 espacio infinito.

El señor Nobeyama aún no había leído el mensaje misterioso y ni siquiera se imaginaba que aquellos meteoritos representaban a “los amigos más importantes de los humanos abandonando la Tierra”.

Los meteoritos eran nada menos que todas las criaturas de la Tierra con
20 excepción de los seres humanos.

(24) Después que la lluvia de meteoritos pasó, la Tierra se tornó de un color plomizo y enseguida algo extraordinario aconteció.

Después le salieron piernas en forma de zigzag a la Tierra.

25 En un instante la Tierra con un mapa mundial en ella se transformó en un pulpo soltando un chorro de tinta y voló más allá del universo.

El señor Nobeyama deprisa corrió tras el pulpo.

En el mensaje estaban marcadas las siguientes palabras:

«Cuando se den cuenta, será demasiado tarde. Norasteldamas».

Fin

Traducido por Hisashi IWAMATSU/ Hatsuo IWAMATSU

7 注文の多い料理店

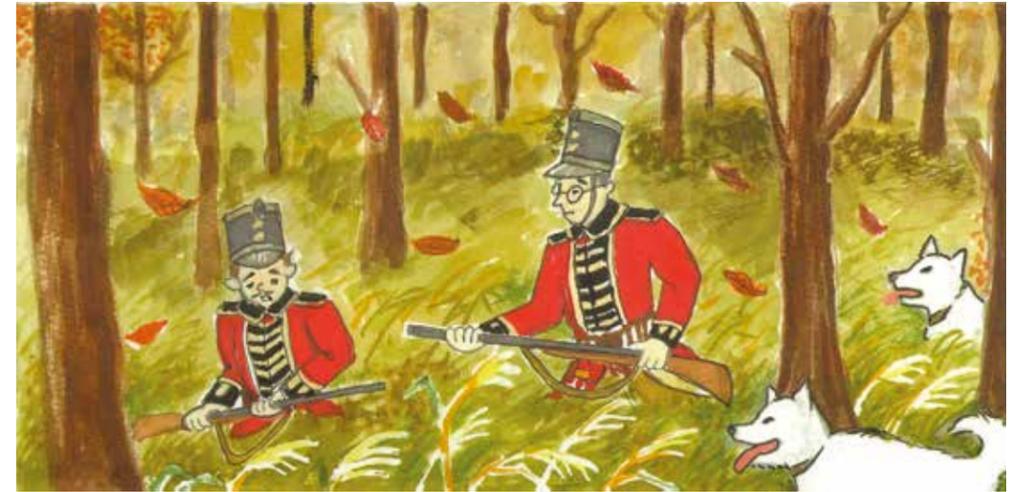
El restaurante con muchos pedidos

みやざわ けんじ さく
宮沢 賢治 作

Cuento : Kenji MIYAZAWA

ささき ひろこ え
佐々木 ひろこ 絵

Ilustración : Hiroko SASAKI



(1) 二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二匹つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、あるいておりました。

- 5 「ぜんたい、ここの山はけしからんね。鳥も獣も一匹もいやがらん。なんでもかまわないから、早くタンタアーンとやってみたいもんだなあ。」
「鹿の黄色な横っ腹なんぞに、二、三発お見舞いもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたっと倒れるだろうねえ。」
それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらい山奥でした。

(2) それに、あんまり山がものすごいので、その白熊のような犬が、二匹いっしょにめまいを起こして、しばらくうなって、それからあわをはいて死んでしまいました。

- 15 「じつにぼくは、二千四百円の損害だ。」と、一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちょっとかえしてみ言いました。
「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もう一人が、くやしそうに、頭をまげて言いました。
はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もうひとりの紳士の、顔つきを見ながら言いました。
「ぼくはもうもどろうかとおもう。」
「さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし腹もすいてきたしもどろろとおもう。」
「それじゃ、これで切りあげよう。なあにもどりに、昨日の宿屋で、山鳥を十円も買って帰ればいい。」
25 「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか。」

(1) Dos jóvenes caballeros en uniformes de soldados ingleses caminaban con unas lustrosas escopetas con dos perros como osos polares en las profundidades de las montañas. Al caminar, sonaban las hojas secas como crujidos y conversaban lo siguiente:

- 5 «Las montañas aquí no me gustan. Tienen ningún animal salvaje ni siquiera pájaros. Sea lo que sea, me gustaría cazarlo pronto. Me gustaría hacer un buen tiro».
«Sería maravilloso darle al flanco amarillo de un venado dos o tres tiros. Seguro que se retorcerá mucho antes de caer».
10 Las montañas ahí eran tan profundas como el tirador profesional que los guió se perdió en el camino y salió a algún lugar desconocido.

(2) Además, las montañas ahí eran tan aterradoras que los dos perros como osos polares, después de sentir vértigos, gruñeron por un tiempo y enseguida murieron soltando una espuma blanca por la boca al mismo tiempo.

Mirándole el párpado al perro, uno de los caballeros dijo: «Esto es una pérdida de 2,400 yenes para mí».

Con decepción e inclinando la cabeza hacia abajo, el otro dijo: «Yo tengo una pérdida de 2,800 yenes».

20 Con su rostro un poco pálido el primero de los caballeros le dijo al otro, observándole:

«Estoy pensando en regresar».

«Como tengo hambre y frío, yo también pienso que debemos regresar».

«Entonces, terminemos aquí. No se preocupe. En la posada donde nos

25 hospedamos ayer, podemos comprar faisanes a 10 yenes y los llevar a casa».

«También tenían conejos, ¿no es lo mismo? Siendo así da lo mismo. Entonces regresemos».



(3) ところが どうも 困った ことは、どっちへ 行けば もどれるのか、いっ
こうに 見当が つかなくなってしまいました。

風が どうと 吹いてきて、草は ざわざわ、木の葉は かさかさ、木は ごと
んごとんと 鳴りました。

5 「どうも 腹が すいた。さっきから 横っ腹が 痛くて たまらないんだ。」

「ぼくも そうだ。もう あんまり 歩きたくないな。」

「歩きたくないよ。」

「ああ 困ったなあ。何か たべたいなあ。」

「食べたいもんだなあ。」

10 二人の 紳士は、ざわざわ 鳴る すすき の中で、こんな ことを 言いま
した。

(4) その 時 ふと うしろを 見ますと、立派な 一軒の 西洋造りの 家が
ありました。そして その 玄関には、

15



と いう 札が でていました。

20 「君、ちょうど いい。ここは これで なかなか 開けているんだ。入ろうじゃ
ないか。」

「おや、こんな ところに おかしいね。しかし とにかく 何か 食事が で
きるんだろう。」

「もちろん できるさ。看板に そう 書いて あるじゃ ないか。」

25 「入ろうじゃ ないか。ぼくは もう 何か 食べたくて 倒れそうなんだ。」



(3) Sin embargo, el problema era que los dos no tenían idea de cómo regresar
a casa.

El viento empezó a soplar con mucha fuerza, haciendo rugir a los árboles. La
hierba y las hojas de los árboles empezaron a silbar.

5 «Estoy hambriento, tengo tanta hambre que siento dolor en el estómago».

«Yo también. Ya no deseo caminar más».

«Yo tampoco».

«Y ahora, ¿qué hacemos? Deseo comer algo».

«Yo también».

10 En la hierba SUSUKI silbante, fue como dijeron los dos caballeros.

(4) En ese preciso momento, los dos miraron hacia atrás y encontraron una
magnífica casa construida al estilo occidental. En la entrada había un letrero
que decía:

15



20

«¡Mira eso! Este lugar está inesperadamente urbanizado. Vamos entrando».

«¿Oh, un restaurante aquí en las montañas? ¡Qué extraño! Bueno, sea como
sea, creo que podremos comer algo».

«Claro que sí. Así dice el letrero».

25 «Entremos. Estoy con tanta hambre que pienso que me voy a desmayar».



ふたり 二人は げんかん 玄関に た 立ちました。げんかん 玄関は しろ 白い せと 瀬戸の レンガで 組んで、じつに 立派な もんです。
そして ガラスの 開き戸が たって、そこに きんもじ 金文字で こう 書いて ありました。

5 《どなたも どうか お入りください。けっして ご遠慮は ありません。》

ふたり 二人は そこで、ひどく よろこんで い 言いました。
「こいつは どうだ、やっぱり 世の 中は うまく できているねえ。今日の 10 一日 なんぎしたけど、こんどは こんな いい ことも ある。この うちの 料理店だけれども ただで ごちそうするんだぜ。」
「どうも そうらしい。けっして ご遠慮は ありませんと いうのは その 意味だ。」
ふたり 二人は 戸を お 押して、なか 中へ 入りました。そこは すぐ ろうか 廊下に なっていま 15 した。その ガラス戸の 裏側には、きんもじ 金文字で こう なっていました。

《ことに 肥った お方や 若い お方は、大歓迎いたします。》

(5) ふたり 二人は だいかんげい 大歓迎と いうので、もう おお 大よろこびです。
20 「君、ぼくらは だいかんげい 大歓迎に あたっているのだ。」
「ぼくらは りょうぼう 両方 兼ねているから。」
「ずんずん ろうか 廊下を すす 進んでいきますと、こんどは みず 水いろの ペンキぬりの 扉 25 が ありました。
「どうも 変な 家だ。どうして こんなに たくさん 戸が あるのだろう。」
「これは ロシア式だ。寒い とこや 山の中は みんな こうさ。」
そして ふたり 二人は その 扉を あけようと しますと、上に 黄いろな 字で 30 こう 書いてありました。

《当軒は 注文の 多い 料理店ですから、どうか そこは ご承知ください。》



Los dos se pararon en la entrada. Era una entrada magnífica construida con ladrillos blancos de Seto.

Había una puerta de vidrio, que tenía escrito con letras doradas lo siguiente:

5 «Todos son bienvenidos. Estamos contentos de poderles servir».

Los dos estaban súper felices y decían:

«Esto es un mundo maravilloso en el que vivimos a pesar de haber tenido problemas en el día, pero mira que afortunados somos. Parece que 10 tendremos un servicio gratuito».

«Parece que sí. Eso de que: "Estamos contentos de poderles servir" debe de significar eso».

Los dos empujaron a la puerta y entraron en el restaurante. Luego en la 15 entrada había un pasillo. En la parte posterior de la puerta de vidrio había otro mensaje en letras doradas que decía:

«Acogemos con satisfacción en especial a los jóvenes y gordos».

(5) Los dos saltaron de felicidad al saber que eran bien recibidos.

20 «Es una gran bienvenida para nosotros».

«Nos ajustamos a ambas condiciones».

Ellos avanzaron por el pasillo y seguidamente encontraron una puerta pintada de azul.

«¡Qué casa más extraña! ¿Por qué será que tiene tantas puertas?»

25 «Fue construida al estilo ruso. En todos los lugares fríos o en las montañas los tienen».

Cuando iban a abrir la puerta, había otro mensaje dorado en la parte superior:

30 «Este es un restaurante con muchos pedidos. Gracias por su comprensión».



「なかなか はやっているんだ。こんな ^{やま}山の ^{なか}中で。」
 「それあ そうだ。見たまえ、東京の ^{おお}大きな ^{りょうりや}料理屋だって ^{おお}大通りには ^すす
 くないだろう。」
 二人は ^い言いながら、その ^と扉を ^ああけました。すると ^{うらがわ}その ^{うら}裏側に、

5 ^{ちゅうもん}注文は ^{ずいぶん}ずいぶん ^{おお}多いでしょうが ^{どうか}どうか ^{いちいち}いちいち ^ここらえてください。》

「これは ^{ぜんたい}ぜんたい ^{どう}どう ^{いう}いうんだ。」一人の ^{ひとり}紳士は ^{しんし}顔を ^{かお}しかめました。
 「うん、これは ^{ちゅうもん}きっと ^{おお}注文が ^{おお}あまり ^{おお}多くて ^{おお}支度が ^{おお}手間取るけれども
 10 ^{ごめん}ごめん ^{ください}くださいと、^{こう}こう ^{いう}いう ^{こと}ことだ。」
 「そうだろう。早く ^{はや}どこか ^{へや}部屋の ^{なか}中に ^い入りたいもんだな。」
 「そして ^{すわ}テーブルに ^{すわ}座りたいもんだな。」

(6) ^とところが ^{どうも}どうも ^{うる}うるさい ^{こと}ことは、^{また}また ^と扉が ^{ひと}一つ ^{あり}ありました。そ
 15 ^{して}して ^{その}その ^{わき}わきに ^{かがみ}鏡が ^かかかって、^{その}その ^{した}下には ^{なが}長い ^{なが}柄の ^えついた ^{ブラ}ブラ
^シシが ^お置いてあったのです。
^と扉には ^{あか}赤い ^じ字で、

20 ^{きやく}お客様がた、^ここで ^{かみ}髪を ^{きちん}きちんと ^{して}して、
^{それ}それから ^ははきもの ^のの ^{どろ}どろを ^お落としてください。》

と ^か書いてありました。
 「これは ^{どうも}どうも ^ももっともだ。僕も ^{ぼく}さっき ^{げんかん}玄関で、^{やま}山の ^{なか}中だと ^{おも}思って
 25 ^見見くびったんだよ。」
 「^{さほう}作法の ^{きび}きびしい ^{うち}家だ。きっと ^よよほど ^{えらい}えらい ^{ひと}人たちが、^{たび}たび ^く来
 るんだ。」
 そこで ^{ふたり}二人は、^{きれい}きれいに ^{かみ}髪を ^けけずって、^{くつ}くつの ^{どろ}どろを ^お落としました。



«¡Mira! A pesar de estar en medio de las montañas, debe de ser un restaurante muy popular».

«Claro que sí. Incluso en Tokio usted no puede encontrar muchos restaurantes grandes en las calles principales».

5 Al comentar sobre esto, los dos abrieron la puerta. Detrás de la puerta, también había un mensaje:

«Los pedidos son muchos. Así que les pedimos que tengan paciencia».

10 Uno de los caballeros frunció la frente, preguntándose: «¿Qué significa esto?»

«Bueno, eso mismo, es lo que debe de significar que están sobrecargados de pedidos y que van a demorar un poco más de lo esperado. Seguramente están pidiendo disculpas por eso».

«Ah, debe de ser eso mismo. Quiero ingresar en alguna sala».

15 «Yo quiero sentarme junto a una mesa».

(6) Pero desgraciadamente había otra puerta de nuevo. Junto a esta había un espejo colgado y debajo de este, un cepillo con mango muy largo.

En aquella puerta estaba escrito en letras rojas lo siguiente:

20 «Estimados clientes, en este lugar arregle bien su cabello.
 Por favor retire el barro de sus zapatos».

«Tienen razón. No podemos menospreciar el lugar, solo por estar en medio de las montañas».

«Son muy exigentes con gran etiqueta. De seguro que mucha gente importante viene con frecuencia a este lugar».

De esta manera los dos caballeros tenían el pelo bien peinado y los zapatos libres de barro.



そしたら、どうです。ブラシを 板の 上に おくや いなや、そいつが ぼうつ
と かすんで なくなって、風が どうと 部屋の中に入ってきました。
二人は びっくりして、たがいに よりそって、扉を がたんと 開けて、次
の 部屋へ 入って 行きました。早く 何か 暖かい ものでも 食べて、元気
5 を つけておかないと、もう 途方も ない ことになってしまうと、二人とも
おも 思ったのです。

(7) 扉の 内側に、また 変な ことが 書いてありました。

10 <<鉄砲と 弾丸を ここへ 置いてください。>>

みると すぐ 横に 黒い 台が ありました。
「なるほど、鉄砲を 持って ものを 食うと いう 法は ない。」
「いや、よほど えらい ひとが しじゅう 来ているんだ。」
15 二人は 鉄砲を はずし、帯皮を 解いて、それを 台の 上に 置きました。

(8) また 黒い 扉が あきました。

<<どうか ぼうしと がいとうと くつを おとりください。>>

20 「どうだ、とるか。」
「仕方が ない、とろう。たしかに よっぽど えらい 人なんだ。奥に 来て
いるのは。」
二人は ぼうしと オーバーコートを くぎに かけ、くつを めいで ペたペ
25 た 歩いて 扉の中に入りました。



¡Y qué debería pasar después! Tan pronto como devolvió el cepillo a la mesa, se desvaneció en la nada y una ráfaga de viento entró en la sala.

Los dos se asustaron y se agarraron el uno al otro. Abrieron otra puerta e ingresaron en otra sala. Los dos temían que algo raro pudiera pasar, así que
5 necesitaban comer algo caliente inmediatamente para sentirse fuertes.

(7) En la parte interna de la puerta, había nuevamente otro mensaje:

<<Coloquen aquí sus escopetas y balas>>.

10 Encontraron una mesa negra cerca.
«Entiendo. No son buenas maneras que comáis con la escopeta al hombro».
«Tal vez personas muy importantes frecuentan este lugar».
Dejaron sus armas y cinturones en la mesa.

15 (8) En esta oportunidad una puerta negra se abrió.

<<Por favor quítese los sombreros, los abrigos y los zapatos>>.

20 «¿Nos vamos a quitar?»
«No hay otra, nos vamos a quitar. Debe haber clientes muy importantes adentro».
Los dos colgaron sus sombreros y abrigos en los ganchos. Se sacaron los zapatos y entraron descalzos por la puerta.

(9) 扉の裏側には、

《ネクタイピン、カフスポタン、めがね、さいふ、その他金物類、
ことに とがったものは、みんなここに置いてください。》

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、口を
開けて置いてありました。かぎまでそえてあったのです。

「はあ、何かの料理に電気を使うとみえるね。金気のものあぶ
ない。ことに とがったものはあぶないとこう言うんだらう。」

「そうだらう。してみると勘定は帰りにここで払うのだらうか。」

「どうも そうらしい。」

「そうだ。きっと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスポタンをとったり、みんな金庫の
中に入れて、ぱちんと錠をかけた。

(10) すこし行きますとまた扉があって、その前にガラスのつぼが
一つありました。扉にはこう書いてありました。

《つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。》

みるとたしかにつぼの中のもの牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだらう。部屋のなかあんまり暖かい
とひびが切れるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらい

人が来ている。こんなことで、案外ぼくらは、貴族と近づきになるか
も知れないよ。」

二人はつぼのクリームを、顔にぬって手にぬって、それからくつ下
をぬいで足にぬりました。それでもまだ残っていましたから、それは
二人ともめいめいこっそり顔へぬるふりをしながら食べました。

(11) それから大急ぎで扉を開けますと、その裏側には、

《クリームをよくぬりましたか。耳にもよくぬりましたか。》

と書いてあって、ちいさなクリームのつぼがここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳にはぬらなかつた。あぶなく耳にひびを切ら
すところだつた。この主人はじつに用意周到だね。」

(9) Detrás de la puerta estaba escrito:

«Coloquen aquí los objetos tales como alfileres de corbata, los gemelos, las
gafas, las billeteras y todo lo metálico, en especial cosas puntiagudas».

Luego junto a la puerta había una caja fuerte negra preciosa, que estaba
abierto. También había la llave por la caja fuerte.

«Ajá, ellos de seguro usaran la electricidad para cocinar, por eso los objetos
metálicos son peligrosos, sobre todo los puntiagudos».

«Eso mismo. ¿Será que aquí pagaremos la cuenta antes de retirarnos?»

«Por supuesto que así será».

«Debe de ser así».

Los dos colocaron los objetos dentro de la caja fuerte, tales como gafas, los
botones de puño y luego echaron llave.

(10) Un poco más adelante encontraron otra puerta y delante había un frasco
de vidrio. En la puerta se podía leer lo siguiente:

«Úntese su rostro, sus manos y sus pies con la crema del frasco
completamente».

Ellos miraron dentro del frasco, el cual contenía crema de leche.

«¿Untarse la crema? ¿Qué querrá decir eso?»

«Afuera hace mucho frío, ¿cierto? Si dentro de la sala estuviera muy
caliente, las grietas se abren. La crema es para evitar eso. Muchas personas
importantes deben estar en lo profundo de la casa. Quién sabe, después de
todo esto que estamos pasando, logremos conocer y hacernos amigo de
algún aristócrata».

Los dos se untaron la crema en su rostro, sus manos y se quitaron sus
medias para poner en sus pies. Aun así, sobró un poquito y cada uno de los
dos fingió ponérselo en su rostro mientras se lo comía furtivamente.

(11) Después abrieron otra puerta y en la parte posterior estaba escrito:

«¿Se untaron la crema mucho? ¿Se untaron también por las orejas?»

Había un frasco pequeño con crema.

«Ah, no me unté en las orejas. Me había olvidado. El dueño aquí es muy
precavido y pensó que las orejas se agrietan».



「ああ、細かい ところで よく 気が つくよ。ところで ぼくは 早く 何か 食べたいんだが、どうも こう どこまでも 廊下じゃ 仕方が ないね。」
すると すぐ その 前に 次の 戸が ありました。

5 **《料理は もうすぐ できます。
十五分と お待たせは いたしません。
すぐ 食べられます。
早く あなたの 頭に ビンの 中の 香水を よく 振りかけてください。》**

10 そして 戸の 前には 金ピカの 香水の ビンが 置いてありました。
二人は その 香水を、頭へ ぱちぱちや 振りかけました。ところが、その 香水は、どうも 酔のような 匂いが するのです。
「この 香水は へんに 酔くさい。どうしてなんだろう。」
「まちがえたんだ。下女が 風邪でも 引いて まちがえて 入れたんだ。」
15 二人は 扉を あけて 中に入りました。

(12) 扉の 裏側には、大きな 字で こう 書いて ありました。

20 **《いろいろ 注文が 多くて うるさかったでしょう。お気の毒でした。
もう これだけです。どうか からだ中に、つぼの 中の 塩を たくさん
よく もみこんでください。》**

なるほど 立派な 青い 瀬戸の 塩つぼは 置いて ありましたが、こんどと
いう こんどは 二人とも ぎょっと して おたがいに クリームを たくさん
25 ぬった 顔を 見合わせました。



«Sin duda él cuida muy bien de los detalles. Ciertamente estoy muriéndome de hambre. Pero debemos seguir por este pasillo que parece no tener fin, ¿no es cierto?»

Luego seguidamente en el frente encontraron otra puerta.

5 **《La comida está casi lista.
Será servida en unos 15 minutos.
Luego podrán comer.
Aplíquese mucho perfume del frasco a su cabeza.》**

10 En frente de la puerta había un brillante frasco dorado de perfume .
Los dos se aplicaban el perfume a sus cabezas. Pero el perfume olía a vinagre.

«Yo no sé, pero este perfume huele a vinagre. ¿No es extraño?»

15 «Pienso que se equivocaron. De seguro que la criada cogió la gripe y colocó vinagre en vez de perfume».
Los dos abrieron la puerta y entraron.

(12) Con unas enormes letras detrás de la puerta estaba escrito lo siguiente:

**《Deben estar muy cansados con tantas exigencias. Lo lamentamos mucho por eso. Ya no le solicitaremos ningún pedido más.
Por favor frótese bien todo el cuerpo con la sal del frasco.》**

25 Había un hermoso frasco azul de sal de Seto. En esta oportunidad los dos sintieron pánico y volvieron sus caras llenas de crema para mirarse el uno al otro.

「どうも おかしいぜ。」

「ぼくも おかしいと 思う。」

「たくさんの注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、
5 来た人に食べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家と
いうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが・・・」
がたがた がたがた、ふるえだして もうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼ、ぼくらが・・・うわあ。」がたがた がたがた ふるえだして、
10 もものが言えませんでした。

「逃げ・・・」がたがた しながら一人の紳士はうしろの戸を押し
としましたが、どうです。戸はもう一分も動きませんでした。

(13) 奥の方にはまだ一枚扉があって、大きなかぎ穴が二つつき、
15 銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあって、

「いや、わざわざご苦労です。」

「大へん結構にできました。」

「さあさあおなかにお入りください。」

20 と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い
眼玉がこっちをのぞいています。

「うわあ。」がたがた がたがた。

「うわあ。」がたがた がたがた。

25 二人は泣き出しました。

(14) すると戸の中では、こそこそこんなことを言っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文
30 が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを
書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けてくれやしないんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらが入って来なかったら、
それはぼくらの責任だぜ。」

35 「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしやい。いらっしやい。いらっ
しやい。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんでおき
ました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお
皿にのせるだけです。早くいらっしやい。」

«Hay algo errado».

«Yo también pienso que hay algo errado».

«“Muchos pedidos” significa que son ellos los que nos hacen el pedido a nosotros».

5 «Bueno yo pienso así. La comida al estilo occidental no es servir a las personas que vienen a comer, pero si cocinarlas al estilo occidental y comérselas. Eso significa que nos van a...»

Comenzó a temblar y no podía hablar nada más.

«Bueno, bueno, ¡no, no, no por Dios!» Temblaba tanto que apenas podía
10 hablar.

«Hu-hu-huir...huyamos». Temblando, uno de los caballeros intentó empujar la puerta de atrás, pero esta no se movía ni un poquito.

(13) Al fondo del pasillo había otra puerta con dos grandes ojos de la
15 cerradura recortado en forma de tenedor y cuchillo plateados. Y estaba escrito:

«Gracias por el esfuerzo.

La comida está en su punto.

20 Vamos, entre».

En eso, dos globos oculares azules les observaban a través de los ojos de la cerradura.

«¡Oh, Dios mío!» Uno de los dos temblaba de miedo.

25 «¡Oh, no!» El otro también temblaba igual de duro.

Los dos se echaron a llorar.

(14) Fue en eso que escucharon los susurros al otro lado de la puerta.

«Esto no está bien. Lo han descubierto. Ellos no se han frotado bien la sal en
30 sus cuerpos».

«Es lógico. El mensaje del gran maestro era malo. Escribió una frase muy tonta: “Deben estar muy cansados con tantos pedidos. Lo lamentamos mucho por eso”».

«Ahora eso no tiene importancia. Igual el gran maestro no nos dará ni un pedacito de hueso».

35 «Sin duda, pero si ellos no entran acá, será nuestra responsabilidad».

«Entonces vamos a llamarlos. ¡Señores clientes, pasen! ¡Pasen! Los platos están lavados y las hojas están con sal. Solo faltan ustedes para una buena combinación con las hojas y a colocarlos en los platos blancos. ¡Vamos,
40 venga pronto!»



「へい、いらっしやい、いらっしやい。それとも サラダは お嫌きらいですか。そ
んなら これから 火ひをおこして フライに してあげましょうか。とにかく
早く いらっしやい。」
ふたりは あんまり 心こころを 痛いためた ために、顔かおが まるで くしゃくしゃの 紙かみ
5 くずのように なり、おたがいに その 顔かおを 見み合わせ、ぶるぶる ふるえ、声
も なく 泣なきました。
なか
中では ふっふっと わらって まだ さげんでいます。
「いらっしやい、いらっしやい。そんなに 泣ないては せっかくの クリームが
なが
流ながれるじゃ ありませんか。へい、ただいま。じきに もってまいります。さあ、
はや
10 早く いらっしやい。」
「早く いらっしやい。親おや方が もう ナプキンを かけて、ナイフを もって、
した
舌したなめずりして、お客きやくさま方を 待まちっていられます。」
ふたりは 泣ないて 泣ないて 泣ないて 泣ないて 泣なきました。

15 (15) その とき うしろから いきなり、
「わん、わん、ぐわあ。」と いう 声こえが して、あの 白熊しろくまのような 犬いぬが
にひき と 二匹、扉へを つきやぶって 部屋へやの 中なかに 飛とびこんできました。鍵穴かぎあなの 眼玉めだまは
たちまち なくなり、犬いぬどもは ううと うなって しばらく 部屋へやの 中なかを く
るくる 廻まわっていましたが、また 一ひと声こえ、
20 「わん」と たか 高たかく ほえて、いきなり 次の 戸つぎに 飛とびつきました。扉とは がた
りと ひらき、犬いぬどもは 吸すいこまれるように 飛とんで 行いきました。
その 扉との 向むこうの まっくらやみの 中なかで、
「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」と いう 声こえが して、それから がさがさ 鳴な
りました。



«Vamos, venga, venga, venga. ¿Ustedes no desean una ensalada? Entonces
prepararemos un fuego y lo freímos. De cualquier manera, vengan pronto».
Los dos estaban tan asustados por el miedo que sus rostros parecían los
desperdicios de papel arrugado. Ellos se miraron el uno al otro y temblando
5 lloraron en silencio.
Los de adentro seguían riéndose y gritando:
«Entren, pasen. Si siguen llorando de esa manera, la crema que se untaron
con tanto trabajo se escurrirá con lágrimas. Sí, señores, sí. Servimos de
inmediato. ¡Vamos, vengan pronto!»
10 «Vengan pronto. El gran maestro ya se colocó la servilleta y se está
lamiéndose los labios con el cuchillo en la mano. Señores clientes, él los está
esperando».
Los dos lloraban, lloraban y lloraban.

15 (15) “¡Guau, guau, grrr!”
En ese momento, desde atrás escucharon los ladridos de aquellos dos perros
como osos polares. De repente atacaron la puerta y se metieron en la sala. Los
dos globos oculares que estaban mirando a través de los ojos de la cerradura
desaparecieron repentinamente. Los perros caminaron gruñendo por algún
20 tiempo en medio de la sala. De repente ellos ladraron con un tono agudo,
“¡Guau!” y saltaron alto hasta la próxima puerta. La puerta se abrió y los
perros saltaron hacia adentro como si fueran tragados por esta.
Del otro lado de la puerta en la oscuridad solo se oía:
“¡Miau, guau, grrr!” y el sonido de algo crujiente.



(16) 部屋は けむりのように 消え、二人は 寒さに ぶるぶる ふるえて、草
 の 中に 立っていました。

みると、上着や くつや さいふや ネクタイピンは、あっちの 枝に ぶらさがったり、こっこの 根もとに ちらばったり しています。風が どうと 吹いてきて、草は ざわざわ、木の葉は かさかさ、木は ごとんごとんと 鳴りました。
 犬が ふうと うなって もどってきました。

そして うしろからは、

「旦那あ、旦那あ。」と さけぶ ものが あります。

二人は にわかに 元気が ついて、

10 「おおい、おおい、ここだぞ、早く 来い。」と さげびました。

蓑帽子を かぶった 専門の 猟師が、草を ざわざわ 分けて やって来ました。
 た。

そこで 二人は やっと 安心しました。

そして 猟師の もってきた 団子を 食べ、途中で 十円だけ 山鳥を 買っ

15 て 東京に 帰りました。

(17) しかし、さっき 一ぺん 紙くずのように なった 二人の 顔だけは、東京に 帰っても、お湯に 入っても、もう もとの とおりに なおりませんでした。



(16) La sala desapareció como humo y los dos estaban de pie en el centro de la hierba, temblando de frío.

Mirando a su alrededor, vieron sus abrigos, sus sombreros, sus zapatos, sus billeteras, los alfileres de sus corbatas y otros objetos colgados de algunas 5 ramas o al pie de los árboles. El viento empezó a soplar fuertemente, haciendo que los árboles rugieran. Los matorrales y las hojas de los árboles comenzaron a silbar.

Los perros, no se sabe de dónde, aparecieron gruñendo.

Detrás de ellos apareció una persona gritando:

10 «¡Señores, señores!»

De pronto ellos recobraron mucho ánimo y gritaron:

«¡Hola, estamos aquí! ¡Venga pronto!»

El cazador profesional con su sombrero de paja apareció entre los matorrales.

15 Por fin ellos se sintieron seguros.

Después ellos comieron bolitas dulces de arroz que les trajo el cazador. En el camino compraron 10 yenes de faisanes y regresaron a Tokio.

(17) Sin embargo, incluso después de regresar a Tokio o de lavarse con agua 20 caliente, los rostros de papel arrugado de ellos no volvieron a ser como eran antes.

Traducido por Hisashi IWAMATSU/ Hatsuo IWAMATSU

この絵本の制作にあたりご支援をいただいた多くの皆様に深く感謝申し上げます。

(物語)

芥川 龍之介 相馬 泰三 新美 南吉 舟崎 克彦 三間 由紀子
宮沢 賢治

(挿画)

えだ いずみ 佐々木 ひろこ 武 美和 てりい ゆかどうか 武智 祐治
舟崎 克彦 吉田 圭一郎

(スペイン語翻訳)

岩松 寿 岩松 初雄

(朗読)

Martha SALGADO David TARANCO 高橋 正彦 森 秋子

(編集)

新井 明男 小林 昭美 佐野 彩

(デザイン)

小林 秀夫 林 每里花 渡邊 シゲル

(録音協力)

一般財団法人NHKインターナショナルMAスタジオ

(企画・制作)

NPO法人 地球ことば村・世界言語博物館 The Archives of The World Languages

ホームページ <http://www.chikyukotobamura.org>

メール問合せ先 info@chikyukotobamura.org

2020年9月 PDF eBook形式 電子書籍版 発行



Nombre

NPO法人 地球ことば村・世界言語博物館
The Archives of The World Languages
Archivo de Lenguas del Mundo